

# 特集 掛谷誠氏追悼

生態人類学会ニュースレター No. 20 別冊





## 特集 掛谷誠氏追悼

### 同時代者・掛谷誠さんを追悼する

篠原 徹

滋賀県立琵琶湖博物館

敗戦によって日本の多くの都市が瓦礫の町になってしまった1945年に掛谷誠さんは生まれました。まったくの同時代の親友として彼と私は68年間の同時代史を過ごしてきました。どんな人でもおそらく自分の人生のなかでかけがえのない人に出会うものだと思います。掛谷誠さんは私にとりましてそうした人のひとりであります。

日本の村々にかつて「耳塞ぎ餅」という習俗がありました。彼の死は私にとって、この習俗の意味を始めて身体のレベルで理解させるものでした。「聞きたくない」、「耳を塞ぎたい」と、この思いがけない突然の彼の死に狼狽し我を失い慌てました。同年齢のものが亡くなるというのは、「耳を塞ぎたくなる」ほど悲しいことだと実感しました。

もちろん餅を搗いて耳を塞いだわけではありませんし、引き込まれないような呪術を施したわけでもありません。タンザニアのトングウェで長い調査をして、トングウェから呪医としても認められた彼ですが、トングウェに同じような呪術があったかどうかは彼から聞き損ないました。

同時代者として、時代と対峙し問題を直視して思索してきた同年の友を失うということが、これほどの寂寥感に苛まれることだとは思いませんでした。彼の死から3ヶ月経ちますが、この言い知れぬ寂寥感は今後ずっと払拭できないかもしれません。

最近、彼とは私たちが生きた時代とは何であったのだろうか話し合ってきました。幾分かノスタルジアを含みつつ、どうやら我々の時代は終わり、違う時代に踏み込んでしまったのではないかとお互いに語りあったものです。

アフリカ研究において、彼が生態人類学的な研究から地域研究に大きく変わっていったのも、そうしたことと関係があると思います。私たちの時代のノスタルジアと不安の行方を彼に総括してもらいたかった。総括は彼の得意なところでありましたが、私にとりましては羅針盤を失ってしまった思いです。

よく反対の性格のものが惹かれあうといいますが、彼と私はある意味ではそのとおりでありました。ときどき冗談で、「掛谷は知力・気力・体力で構成されている人間だけど、俺は体力・気力・知力の順で構成されているなあ」と言うと、「片方の知力が衰え、もう一方の体力が衰えれば、結果は同じさ」と言っていたのにと、つくづく残念に思います。

おっつけ我々の時代のものがそちらに行くことになるとしても、いささか早すぎたのではありませんか。そんな思いが強いのであります。慎んで哀悼の辞を捧げたいと思います。（この文章は3月22日土曜日に京都大学稲盛財団記念館大会議室で行われた「掛谷誠さん追悼の集い」での弔辞です。山際寿一さんの見事な司会によって「集い」は進行しました。彼は最初に「今日は掛谷誠さんのことを追悼して、大いに泣き笑いましょう」と言いました。私は最初に弔辞を述べることになっていましたが、何も原稿なしでしゃべると途中でグッときて慟哭してしまうのではないかと恐れしました。最初に泣けば滄茫の集いになってしまうかもしれないと思いました。だからあらかじめ泣かないですむような文章を弔辞としてつくって読み上げました。それほど私にとりましてはつらくて悲しいものでありました。）

## 人類学とアフリカを「生きた」旅人

松井 健

東京大学東洋文化研究所

2011年の7月27日、胃の外側にできた直径65ミリのGIST（一種の腺腫）の切除手術を受けた。ガンが胃内壁にできてリンパ液をとおして転移するのに対して、GISTはそういうことはなく、再発率も低く、GISTと診断されてからは、まずは平穏な気分であることができた。8月3日には退院して、その足でレストランにかけつけて肉を食べた。翌年の年賀状で報告したこともあって広く知られるようになり、「松井がガンの手術をしたらしい、もうあれは死ぬで」と大声で宣伝してくれている人がいるという噂なども聞こえてきたが、まったくお見舞いということは誰からもなかった。（和崎洋一さんが昔よく言っていた、京都は団結は鉄よりも硬く、人情は紙よりも薄し、と。）ただ一人、掛谷さんからはお手紙を頂戴した。「君らしくユニークな腫瘍」らしいが、手術後の検査をちゃんと受けて十分に気をつけるように、というやさしい文面であった。（後輩のなかには、研究会で直接顔をあわせて、松井さん切除した腫瘍、どんなやったん？と聞くので、こうこうと説明すると、浮かぬ顔をして、もっと黒かったんちゃうんですか？とぬかしたやつがいる。私は短気粗暴の風はあるが、腹は黒くはない！因みに、この後輩とは曾我亨です。）

思えば1972年に大学院修士課程に入学して以来、掛谷さんにはずい分とお世話になってきた。その頃アフリカの生業研究へと邁進していた研究室内の空気のなかで、アフリカについてはとにかく、生業よりも認識、人間の頭のなかにあることに興味があるなどとうそぶいていたため、指導教官の伊谷純一郎先生は手に負えないと思われたのであろう、ちょっと待っとれ、掛谷いうのが帰ってくる、ということになった。その年の晩秋であったろうか、掛谷さんが帰国されたのは。初対面の印象は、アフリカでついた癖なのであろうか、やたらそこらじゅうでツバを吐く癖のある人だなあ、ということであった。そのあとすぐに掛谷さんに民俗分類やらエスノ・サイレンスやらという当時

の認識人類学のテーマについて話して、大学院での仕事についてディスカッションしていただいた。それは、当時の建物の階段を上ってすぐ右手の掛谷さんの部屋を息込んで訪ねた私にはほんとうにあっけなかった。研究室内では原子令三助手を中心とする、生業中心の仕事こそが生態人類学だという強い圧力を感じていた私には（なにしろ、その頃、研究室の大学院生はすべて原子さんのものの言い方をそのまままねていた！）、まったくありえないと思われるほど、掛谷さんはものわかりがよかった。オー、オーと同意しつつ聞いてくださり、ええやないか、やれ、と激励して下さった。すぐに雑談になったが、掛谷さんの机の上に頭蓋骨が置かれていて、メメント・モリといったような話題があったことしか今では想い出せない。

直近では、自然人類学研究室創立50周年の同窓会の二次会で、ゆっくりとお話することができた。私はすこし早く席をたったが、「いやー、昔のヤツとこうして飲むのは、ホンマ、楽しいな」とおっしゃった。声はすこしかすれ気味だったが、飲むほどに論談風発、私はすっかり掛谷さんの病気のことを忘れていた。それが年末の突然の訃報、大変なショックを受けた。「ちょっと行ってくるワ」と入院されたよし、近くにおられた方がたはもっと驚かれたことだろう。まだ68歳。ローマ時代の諺に、旅をしたものは、長く生きた者よりもものを知る、というのがあらしいが、これを掛谷さんを失ったなぐさめとしたい。

この短い文章のなかに、掛谷さんのことを十分に書きあらわすのは、もとより無理だが、ひとことといえば、掛谷さんは通常の研究者のように人類学やアフリカを「研究した」人ではなかったように思う。最近、とくにマイナー・サイエンスである人類学のおもしろくて、こわいところは、「(研究)する」のではなくて、それを「生きる」ところにあることがはっきりわかってきた。そして、レヴィ=ストロースのいうように、音楽家と民族学者は天性の職だとすると、掛谷さんは、その日常、英子夫人との暮らしや、われわれ後輩とのつきあいからして、まったく一貫して、人類学とアフリカを「生きる」べくして「生きた」人なんだ

なあ、と思わざるをえない。このような稀有な人と出会え、親しくさせていただいたことをありがたく、誇りに思う。

## 掛谷さんと歩いた 10 年

杉村 和彦  
福井県立大学

1990年代の最初から10年ぐらい、掛谷さんとは大変親しく付き合わせていただいた。当時の掛谷さんは一つの思いを持って、弘前大学から京都大学に帰ってきたのだと思う。掛谷さんは京都大学に着任されるや、それまで自らが打ち立てた精緻な生態人類学を投げ捨てんばかりに、地域開発の研究に力を傾注されることになった。

1992年だったと思うが、その後ソコイネ農業大学を舞台に展開するミオンボ林とマテンゴ社会の研究について掛谷さんから初めて話をお聞きした。荒木茂さんと一緒に行われたタンザニアのミオンボ林帯・マテンゴ社会の予備調査から帰ってきたばかりで、これから立ち向かう研究対象について、さまざまな視点から研究の可能性を息せき切って話してくださった。はつらつとした調子が本当に印象的だった。その後、掛谷さんから直接のミオンボプロジェクトへの参加要請もあって、私もそのプロジェクトに長くかかわらせていただくことになった。

掛谷さんが「開発」をやるという、そのことが私にとっては何か非常に新鮮なできごとだった。アフリカの停滞を生み出すといわれる農耕やその生活世界に深い思いを寄せる掛谷さんが、その一方でその「開発」研究を始めようという。一見して矛盾にも映る研究人生の反転が、掛谷さんの内に秘められた思いの深さを私にも強く印象づけた。それまでアフリカ農村社会の中で、平準化機構や最小生計努力を取り出し、さらにはその生活世界の最深部にある呪いの世界に分け入ってフィールドワークを重ねてきた掛谷さんが試みる「開発」とは何だろうか。私は「開発」にある種の否定的な志向を持っていたが、掛谷さんのその熱い思いに驚くとともにその志に深い共感を覚えた。

ソコイネ農業大学の京大亭にしばらく一緒にいたとき、そのような掛谷さんの決意の深さを身近に感じた時がある。その頃の掛谷さんは、在来性の視点をいかにソコイネ農業大学の中に根づかすか、そのための共同研究と大学連携の可能性を模索してまさに粉骨砕身の活動をしていた。ソコイネ農業大学という舞台の中で、掛谷さんは文字通り、プロジェクトのオーガナイザーとして、多くのディシプリンの人を集めた。日本からも農学を中心に様々な若い研究者が集まった。掛谷さんはそういう若い人たちからも、自らも大いに学んで前に向かって進んでいった。ソコイネ農業大学のスタッフたちにも、「俺は農学者じゃないけどな」と言いながら、来るべき21世紀のアフリカの「農学原論」を講じた。

いろいろなアイデアが浮かぶとそれを私たちにも投げかけて意見を求め、またソコイネ農業大学のカウンターパートとも町の飲み屋に繰り出して議論を重ねた。しかし掛谷さんの思いが、近代志向のタンザニアの農学徒たちにそんなに簡単に伝わっていったわけではない。そんな中で掛谷さんは自らのアフリカ研究の原点ともいえるトングウェを伊谷樹一さんと再訪された。そこから帰ってこられた掛谷さんは、かつてのトングウェの生活が大きく解体されていることに大変心を痛められている様子だった。しかし同時に「俺はもう後ろ向きの人類学はしない。前を向いて歩く」と話された。

時代のなかでさらに翻弄されていくアフリカの小さな社会の動向を予感しながら、その中で学問はどこに向かうべきか、掛谷さんは自らに問いかけ続けているように思った。掛谷さんはその問いを自らに課して、40代の後半から50代の終わりまで、自らのもっとも充実する人生の10年間を「開発」という混沌の中においた。掛谷さんなら、すでに掘み出したトングウェの世界をもとに、より精緻な「掛谷学」を構築することもできただろう。しかし掛谷さんはそれを良しとせず、時代を全身で受け止めて、混沌の中を「前に向かって歩く」旅を続けた。

掛谷さんが1人、ドンキホーテのごとく、タン

ザニアの中で紡ぎあげていった世界は、アフリカという「一周遅れの世界」を最先端へと誘う、豊かな未来志向の場であったと思う。掛谷さんは「アフリカの発展」を願って、研究者を訪ねその研究の場に身を置き、そのアクター達を結ぼうとした。「アフリカの発展」を願って、学問の場がそれにふさわしい形で再編される仕組みを作り出そうとした。掛谷さんが残された作品は、文字に書かれた世界だけではない。容易に形にならない世界に身を挺して乗り出し、たくさんの種をまき、多くの人に敬愛された掛谷さん。「開発」という混沌の海を前にして、あえてそこに臨み、その中から掛谷さんが構想した地域学は、これからもアフリカ研究者が常に立ち返るべき参照枠として、時代を超えた価値を秘めているように思う。

## 妥協なき教育と研究姿勢のなかの優しさ

大山 修一

### 京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科

わたしは1992年12月、京都大学人間・環境学研究科の大学院入試を受けようと、掛谷さんの研究室を訪問した。慶應義塾大学3年生からの飛び級を希望しているという、掛谷さんは開口いちばん、「けったいな奴がきたな」と率直な感想をおっしゃった。「西アフリカで砂漠化の調査をやりたい」というと、掛谷さんは体を乗り出すように「きみ、フランス語はできるんか。調査許可の取り方を知ってるのか」とわたしにたずね、わたしは「話せません。知りません」と正直に答えた。そのあと、掛谷さんは「あかん。西アフリカで調査するのは無理や。」とおっしゃり、しばらくのち、「ザンビアの北部に住む焼畑農耕民の地域で森林調査をする気はないか。」とおたずねになった。わたしは「アフリカで調査できるのなら、よろこんで」と答えた。

試験の面接では、「運転免許を取得することは可能か？」と聞かれたことは覚えているが、それ以外は、まったく覚えていない。入学後には、「けったいな奴がきた」、「ガキはいりません」、「ガキとはアフリカへ調査には行きません」という言葉を

投げかけられ、その当時、この言葉の真意を理解できず、掛谷さんに反発しながらも、いつか掛谷さんに認められるようになることを目標に、大学院生の日々を過ごしたように思う。いまから思うと、掛谷さんは自分の都合や希望ばかりを優先させ、身勝手なわたしをたしなめていたのだと思う。

1993年から、掛谷さんの科研隊に入れてもらい、ザンビア北部のミオンボ林に居住するベンバの調査に従事することになった。荒木茂さん（京都大学）に現地、ムレンガ・カプリ村へ連れてってもらい、毎日、衛星画像の写真をみながら、植生調査をつづけた。毎年、春には研究会が開催され、全員のメンバーが集まり、前年度の成果を発表したうえで、その年度の計画を打ち合わせた。研究会に参加することによって、わたしの指導教員だった高村泰雄さん（現在、京都大学名誉教授）、荒木茂さん、杉山祐子さん（弘前大学）、今井一郎さん（現在、関西学院大学）、伊谷樹一さん（現在、京都大学）の研究内容を自分なりに理解し、議論のやりとりから、少しずつプロジェクトの方向性やプロジェクトにおけるわたしの立ち位置を探すようになった。プロジェクトのなかでの立ち位置を探すというのは、いまでも、よくやることだし、年度はじめの交付申請書の旅費の計算や旅行代理店とのやりとり、はさみとのりを使った切り貼りによる書類づくり、年度末の実績報告書づくりを手伝う機会を得たのは、大学院生だったわたしには貴重な経験だった。

わたしが博士課程に上がってから、高村先生が停年退官し、掛谷さんがわたしの指導を引き受けてくださった。わたしの書く文章は悪文のままだった。そのせいもあって、掛谷さんに草稿を出してから、添削が戻ってくるまでには時間がかかった。掛谷さんに催促すると、ひどく怒られた。その気持ちは、今になると、よく分かる。3週間か、4週間ほどすると、呼び出しがかかり、タバコのおいが強い研究室で、真っ赤に添削された論文を渡された。論文の修正に対する講評には、きまったやり方があった。まず論文を目のまえにして、論文全体に対してコメントをしたあと、時間をかけて丁寧に音読してくださり、さいごに修正する

ための大きな方針を伝えてくださった。そのほかに、自分で考えるよう、いくつかの宿題が出された。部屋を出て行くときには、頭が整理され、修正できる気分になったのは不思議である。

1998年2月に、掛谷さんはベンバの村へ来て、わたしの調査の様子を見てくださった。日本を出るまえ、掛谷さんは奥さんの英子さんにひどく叱られたらしく、首都のルサカではえらく落ち込んでいた。酒を飲むたびに「男は女に育てられるんや。おまえには分からんやろうけど。」とおっしゃった。村では、朝と晩のごはんは自炊で、わたしが薪に火をつけ、ごはんを炊く係であった。掛谷さんは、そのごはんのうえに「ゆかりちゃん」と「たまごふりかけ」をかけ、よく食べていた。晩の残りで朝ご飯を済ませようとする、俺に冷や飯を朝ご飯に食わずつもりか!とこっぴどく怒られた。

このときの調査で、わたしはベンバの村むらめぐり、1軒ずつ家を訪問するため、毎日、10から20キロほどを歩きつづけていた。ある日の夕方、疲れ果て、車で寝込んでしまったわたしの姿を見て、「おまえの調査のために来たんやない」と言っていた掛谷さんがわたしのフィールドノートを持ち、「これに書いたらいいんやな」と言って、雨季のミオンボ林のなかへ出かけていった。この調査行での掛谷さんとのやりとりで、生態人類学であれ、地域研究であれ、けっして「分かった」と過信しないこと、いつも謙虚な姿勢で調査をつづけ、地道にデータを積み重ね、ていねいに議論することの重要性を学び、変貌しつづけるアフリカにどう接していくのかという宿題を受け取った。

わたしは1999年3月に博士の学位を取得し、10月に東京都立大学の助手として就職した。その後、12年を経て、2010年10月より、アジア・アフリカ地域研究研究科の教員となった。研究科の創立は1998年4月である。アフリカ地域研究センターが時限をむかえ、新しい大学院の設置に奔走していた掛谷さんがわずかな時間をみつけ、1998年2月にザンビアへ来てくださったことの重みを痛感している。その後、掛谷さんはムレンガ・カプリ村に来ることはなく、ベンバの村びとも、

わたしも、掛谷さんの来訪を強く望んでいたが、それはかなわなかった。久しぶりに広げた真っ赤な添削原稿は、掛谷さんの研究室のタバコのおいがかすかに残っている。わたしにとって、掛谷さんの仕事ぶりは真似できるものではない。掛谷さんの死によって、これまで感じることのなかった後ろ盾をうしない、心のなかに空洞があいてしまったが、きっと掛谷さんは停滞することを望んでいないだろう。掛谷さんの学恩に報いるべき、精進をつづけ、受け取った多くの宿題に取り組んでいきたい。

## 掛谷誠君を偲ぶ

田中 二郎

掛谷君にはじめて会ったのは1963年か64年のことであつたと思う。わたしが理学部動物学科を留年して5回生だつたときか、あるいは卒業して1年浪人生活していたときのいずれかであつた。今西錦司さん、藤岡喜愛さん、谷泰さんが在職しておられた人文科学研究所の以前の古い建物の中庭で、今西さんを隊長とするアフリカ類人猿学術調査隊の出発準備のため若者たちがわいわいと荷造りしたりしている最中であつた。掛谷はまだ工学部の電気に入学生たばかりの1回生か2回生であつた。工学部に入ってきたけれど、高校時代には生物部で活動していただけであつて、アフリカの人や自然に強く興味をもっていたのであろう。彼が人文研をのぞきにきた日の夕方、ちょうど立ち上げたばかりのアフリカ研究会の初めての懇親会が行なわれることになっていた。それを聞いた掛谷は、「いきなりコンパに参加したら駄目でしょうか?」とおそろおそろ尋ねたものである。「まだ組織もなにもしっかり出来上がってない会やから初めての人が飛び込みで入ってきてもかまわないよ。」わたしはそう言って、彼を誘ってコンパ会場に連れて行つたが、それがきっかけとなつて掛谷がアフリカの世界にどっぷりとはまってしまうことになつたのである。

彼は3回生から理学部に転学部して植物学科で学んだあと、大学院は池田次郎さん、伊谷純一郎

さん率いる自然人類学講座へ進学し、修士課程ではトカラ列島の悪石島で人類学のフィールド調査をおこない修士論文にまとめた。

じつは彼をアフリカ研究会のコンパに引っ張り込んだあと、わたし自身は東大文化人類学の大学院に行ったもので掛谷とそれほど密に交流を保っていたわけではない。生態人類学会の前身となった生態人類学研究会を毎年3月下旬に開くようになったのがこのころで、京都サイドでは「あいつは口から生まれてきよったんや」と伊谷さんに陰口をたたかれた通り弁舌のたつ掛谷は若手院生たちのリーダー格の役割をになっていた。

掛谷君とはじめてフィールドを共にしたのは1971年春のアフリカへの旅であった。伊谷純一郎・伊津子夫妻、掛谷誠・英子夫妻、それに妻憲子と9か月になったばかりの長男を伴ったわたしたち総勢7名は、ナイロビからアルーシャに飛び、9人乗りのランドクルーザーをレンタルして一路西へ向かった。伊谷さんはもちろん何度もアフリカへ行かれていたが、今回はじめて奥さんを東アフリカへ同行されたのである。わたしは2度目のカラハリ砂漠への途次で、妻子は初めてのアフリカだった。新婚まもない掛谷夫妻もまたはじめてのアフリカ行で、タンガニカ湖岸の焼畑農耕民トングウェに長期調査に赴く出発点となるものだった。伊谷さん以外はみな東アフリカのサファリは初めての経験であり、それぞれアフリカでの調査地へ入る前にエヤシ湖畔やセレンゲッティ国立公園など、東アフリカの調査地や観光地の目玉となるところでアフリカ旅行の第一歩を肌身で感じておこうという10日間あまりの計画であった。

木登りライオンの群れがいることで有名なマニャラ湖国立公園のロッジに泊まり象やキリン、カモシカなど野生動物に触れたあと、エヤシ湖畔のマンゴーラで富川盛道さん、富田浩造さんが長年研究された遊牧民ダトーガや狩猟採集民ハッザの村でテントを張って人々の生活や踊りを見学した。ンゴロンゴロ国立公園の巨大なクレーターを眼下に見下ろしながらセレンゲッティ平原へと駆け下り、中心地セロネラにある研究所を訪れて、研究所スタッフの案内で公園内をあちこち見学さ

せてもらった。道中、広大なサヴァンナの真ん中をマサイの男がひとり槍をかかえて飄然と歩いているのを見かけて、憲子が「あのどこへ行くんやろね？」と問いかけたのに対し、わたしは「さあ、どっかやろー」とかなんとかええ加減な返事をしたらしい。わたし自身はさだかに覚えがないのだが、英子さんはいまだにそのことを覚えていて、「うちの旦那なら、『そんなこと俺が知るかい』と愛想なく突っ返したに決まってるわ」とおっしゃるのである。

つぎに掛谷君とアフリカを共に過ごしたのは、2度目でかつ最後となった1988年10月の2週間であった。海外学術調査総括班が文部省と長年折衝をくりかえし、ようやくこの年から科研費で年度をまたぎ継続して海外調査が可能となったときである。カラハリのブッシュマンだけでなく、コンゴのアカ・ピグミー、タンザニアのトングウェ、ザンビアのベンバをも含めた総合的な人類学調査が3年間認められ、ザンビアとタンザニアへ赴く掛谷を短期間カラハリ砂漠に誘ったのである。わたしと今村薫がブッシュマン調査に入る際、タンザニアのトングウェ調査に向かう西田正規、ザンビアのベンバ調査に向かう荒木茂と一緒に掛谷君も短期間カラハリ砂漠までやってきてくれたのである。

平準化をモットーとして平等分配を心がけるトングウェに長年親しんできた掛谷も、目の前で繰り広げられるブッシュマンのまことに見事な食べものの分かちあいの光景を見て、改めて狩猟採集民の平等原則の深淵にふれたかのごとく感激していたのが印象深く記憶に残っている。掛谷が大学院を出てからたどった研究遍歴は、指導教授であった伊谷さんの教導と唆しによるところが大きかったのだろうが、後半部分についてはわたしにも大いに責任がある。とくに京都にアフリカ地域研究センターができてその創設のため私が弘前大を辞して京大に転任したあと、掛谷君を筑波大から引き抜いて、弘前大人間行動論研究室の責任者のあとがまにお願いしたこと。そしてわずか3年あまりのちには停年退官を迎えられた伊谷さんの後任として、弘前から京大アフリカセンターへ来ても



らったことである。時限 10 年という宿題を抱えたセンターは次の進展をはかるべき重大な時期を迎えており、わたしと掛谷は時計台の事務局本部へ日参して談合を繰り返し、また文部省まで何度も折衝に出かけたものであった。

掛谷君がアフリカ研究に打ち込み、若いアフリカのフィールド研究者を育てあげてきた研究と教育の偉大な実績はいまさらいうまでもないが、研究センターから大学院研究科への改組拡充を実現させるといった政治的手腕についても、彼の助言と献身的な協力は筆舌につくしがたい大きなものであった。わたしは掛谷には本当にお世話になったし、よき相棒であったと思っている。停年退職後も京都で出会う機会があるごとに、あるいは信越の山小屋などで遊んだときにも旬のグルメ料理などを味わいつつ夜更かしをした。半世紀を超えるつきあいの中、忙しい時期も多かったがのんびりと楽しく過ごすことができた古き良き教員生活時代、そしてあの苦しかった時限 10 年を乗り越えるべく改組拡充をめざした闘いの日々も、いまとなってはすべてが懐かしい思い出となっている。

## せっぱつまったときも猫なで声で — 掛谷誠さんに学んだ危機管理

安溪 遊地

山口県立大学国際文化学部

安溪 貴子

山口大学医学部非常勤

京都大学の自然人類学研究室に通うようになった時、伊谷純一郎先生のもとで生態人類学の道を切り開いていた大先輩に掛谷誠さんがいた。大学院 4 年目の初めてのアフリカ。伊谷先生の指示で掛谷誠さんと英子さんご夫妻が私どもの指南役として、当時ザイールと呼ばれたコンゴ民主共和国でのフィールド探しの旅に同行して下さることになった。

ナイロビからキンシャサに飛び、調査許可証をもらって、国の東端のブカブ近郊のルウィロにある国立科学研究所にたどり着いた。ここでやっと掛谷夫妻と合流し、いよいよコンゴ川上流の調査

予定地キンドゥに向かうことになった。といってもブカブからの直行便はなく、キブ湖をはさんだ北岸のゴマの町に行く飛行機がなかなか飛ばない。掛谷さんが親切なムニャルワンダ人の商人と話して、車を手配してもらえることになった。ゴマの空港でもなかなか飛行機に乗れない。まる一日空港で過ごして、結局空振りにおわって疲れ果ててホテルに戻る日々が続いた。そんな時に、掛谷さんが 2 年間の奨学金をもらってタンガニカ湖畔に降り立った時の経験を聞いた。やっとフィールドワークが始められたと思ったら、警察官がやってきて、ちょっとキゴマの町まで来いと言われて、お二人は着の身着のまま村を出た。ところがこの「出頭」は、首都のダレスサラームでの調査許可の取得まで、5 ヶ月も続いたのだ。タンザニア文部科学省に日参して、調査許可発給のシステムを作らせるという努力がようやく実ったときには、掛谷さんは、みごとなスワヒリ語の能力を身に付けていたのだった。つまり、フィールドで出会うことがどんなに期待はずれでも、その中で人間的な努力を重ねていけば、道は開けることがあるし、その経験から身に付けたものはかけがえのないものであり得るという教えだった。

やっと飛行機に乗れて到着した州都キンドゥの 100 キロほど北の鉱山の町カイロから、私たちのフィールド探しの徒歩の旅を始めることになった。独裁政党的の若手指導者に道案内を頼み、荷物運びのために 2 人の囚人が加わった 7 人で、森の中の街道沿いに歩き、コンゴ川を丸木舟で渡って旅をした。まず若者が村ごとに人々を集めて、モブツ大統領への忠誠の大切さなどの演説をする。それをひきとって掛谷さんがあいさつする。「この二人は、あなた方の暮らしを勉強するためにやってきたのです。できれば半年ぐらい滞在させていただける村を探して旅をしております。」村人たちは、ラジオでしか聞いたことのない、見事なタンザニア・スワヒリ語をあやつる掛谷さんにかなり圧倒されていたらしいことを後に知った。

人々と挨拶を交わし握手する。泊めてもらうときのあいさつやお願い、交流の仕方、お礼をどうするか、ひとつひとつが私どもにとっては、得難

い学びだった。「やっぱりバンツーやな、もてなし方がトングウェと同じや」と、お二人の初めてのフィールドとの対比も聞いた。

一晩泊めてもらって朝、森の中を歩いて小さな集落にさしかかった。掛谷さんが村人たちと握手をしていく。窓からのぞいている年老いた女性に歩み寄った掛谷さん、英子さんに続いて握手した私たちが握った手には指が一本もなかった。ハンセン病の患者だったのだ。菌は弱く、握手したぐらいで感染することはないのだが、そうと知っていても心理的な抵抗があることを、にこやかにやってみせるのだという、掛谷式フィールドワークの真髓を教えられた。

「しごき」も受けた。少し先を歩いていた掛谷さんが、荷物を下ろして汗をふきながら、上を見てスワヒリ語で「鳥を見ようよ」と言った。つられて上を見ながら歩いて行った貴子は、道を横切るサファリアリの行列にみごとに足を突っ込んでしまい、体中あちこちを噛まれることになったのだった。

あと40キロほど歩けば、町のホテルの対岸まで着けると目星をつけて旅の最後の村を出るときに、荷物運びの囚人たちが逃げてしまった。仕方なくテントや食器などのすべての荷物のかついで歩いた。

森の中のふみわけ道をたどって一本橋を渡ったり、廃村を通りぬけたりした。街道に出てからの道のりも遠かった。夕ぐれの中、ホテルの対岸まできたもののフェリーの最終便に乗り遅れ、民間のモーター船もガソリン切れで動かない。ここで野宿するのかと思った時、幅600メートルの夜の川を渡す丸木舟をようやくつかまえた。言い値は昼間のフェリー料金の100人分もするのだが、他に方法がない。ところが漕ぎ出してから、それは1人分で4倍払えという。真っ暗な中洲に漕ぎ寄せて「ここで一晩寝てみるかい？ ここのワニはお腹が大きいよ」と脅すのである。遊地はかっとなったが、掛谷さんはおちついた猫なで声で「トゥクタクバリアーナ（折れ合おうじゃないか）」と値引き交渉を始めて、かなり値引きさせたのだった。

体を洗う水がコップ一杯しかなくても、どんな

危機に直面しても、にっこり笑って受け止める肝をもて、これが、掛谷夫妻から伝えられた生き方だった。

## 掛谷誠さんを偲んで

山田 孝子

京都大学名誉教授

掛谷誠さんには、理学部自然人類学研究室の先輩諸氏の中でも格別の思い出があります。掛谷さんとの最初の出会いは、3回生～4回生のほぼ1年間を大学闘争とともに過ごし、理学部数学科を卒業した1970年でした。じっくり進路を考えようと理学部研修員となりましたが、人類学を志すことを視野に、数学教室の隣にあった自然人類学研究室の伊谷純一郎先生のもとを訪ねたことに始まります。ゼミ室にはトカラ列島悪石島のボゼの仮面が飾られており、その強烈さに目を奪われたのですが、このボゼを運んできたのがトカラ列島で調査をされていた掛谷さんでした。

当時、伊谷先生のもとでは、霊長類社会の研究から人間社会の研究へとフィールドワークの対象が拡がり、生態人類学的アプローチへと研究の舵が切られていたときでした。掛谷さんは人間社会研究のパイオニアとして研究室を牽引し、ゼミ室では新たな研究領域の開拓に燃え、熱気を帯びた**Man the Hunter**の読書会などが開かれていました。読書会、研究室のゼミや催しなどに参加させてもらううち、伊谷先生と絶妙なサポート役の掛谷さんに率いられた“家族的”研究室に魅せられ、理学研究科自然人類学研究室での研究を目指し、大学院入試の勉強を始めたのでした。銀閣寺にあった掛谷さんの鈍聚庵に集う多種多彩な人たちとのふれ合い、掛谷さんのアフリカ調査行前の英子さんの北山の林（“原野”）での結婚式など、当時の新鮮で、刺激的な一時は懐かしい思い出となっています。

1972年に大学院理学研究科自然人類学教室に晴れて入学したときには、掛谷さんはまだトングウェの調査中で、帰国されたのはその年の秋でした。M1の12月の初めての沖縄調査出発前の私の

ゼミ発表では、調査地変更について先輩たちの厳しいコメントが続出するなかで、掛谷さんが厳しくも温かく見守ってくれたことはその後の調査の後押しになりました。また、出遅れたフィールド調査の資料整理が修士研究発表に間に合いそうになく、掛谷邸に泊まり込んでの指導を引き受けていただいたこともありました。掛谷さんには、研究者としての巢立ちを助けていただいたという学恩を忘れることができません。

掛谷さんと密に接した思い出は修士課程までで、掛谷さんは、私が博士課程に進学した1974年には福井大学に移られました。福井では、学生たちとともに、今庄町の山村で民家を借りて、「生活感覚の中での調査」を実践されており、一度訪れたことがありました。生活者の目線でのフィールドワークの重要さを、自らの実践で試されていたことがとても印象に残っています。M2のときの一件以来、掛谷邸には「出入り禁止」どころか、「いつでも出入り自由」の扱いをしていただきましたが、気兼ねなく訪れことのできたのは、他者を受け入れる度量の広さ、自然体で人を受け入れる掛谷さんと英子さんのお二人のもてなしこそであったと思っています。掛谷さんと英子さんの丁々発止の二人三脚ぶりは掛谷邸を訪れる楽しみの一つでもあり、掛谷さんと私という関係というよりも、掛谷さん、英子さん、私という3人の会話を楽しむという関係へ移っていきました。1997年に京都に戻った私は、一時宇治の宿舎に住んだこともあり、宇治に居を構えられていた掛谷さんと英子さんとは、それ以来「ご近所づきあい」が続いてきたところでした。

最近にも掛谷さんの包容力、指導力の大きさをつくづく感じさせられることがありました。2013年に鹿児島大学の国際島嶼教育研究センターを訪れたときには、センター併任の桑原季雄先生から、「掛谷さんをご存じですか」という問いかけがあり、筑波大学時代に教えていただいたと告げられ、奇遇に驚きました。桑原先生の研究姿勢には、そこはかとなく共通するものを感じながら話が弾んでいたときのことでしたので、掛谷さんの筑波での院生指導に思いを馳せたのでした。同じ

ようなことを琉球大学国際沖縄研究所での研究会でも経験し、琉球大学にも筑波時代の掛谷さんの薫陶を受けた研究者が活躍されていることを知りました。掛谷さんの蒔いたフィールドワークの教えが各地に広がっていることを改めて感じ、神戸に戻ってから掛谷さんに電話で伝えたのでした。「ああ、そうか」と、淡々とした一言が返ってきましたが、その言葉には、掛谷さんの人柄そのものが表現されていたと思っています。

私が定年退職したときには、篠原さんも囲んでの宴の円を開いていただき、「これからの老後と一緒に楽しみましょう」ということでした。12月下旬に英子さんから食事の誘いではなく、掛谷さんのご逝去を告げられたときには、あまりにも突然で、英子さんには月並な言葉をかけることしかできませんでした。先を急がれたことは残念でたまりませんが、掛谷さんのご冥福を心からお祈りいたします。

## 掛谷さんと Tongue の人びと

丹野 正  
弘前大学名誉教授

私が掛谷さんと知り合ったのは1967年の春に京大理学部動物学科に進学してからで、それ以後、先輩や友人と一緒に飲み食いしながらいろいろなことを語り合うようになった。私はほぼ聞き役で、彼の論議のし方にはいつも感心していたものである。私が大学院で人類学を専攻したのも彼の影響を受けてのことだったし、その後もずっと公私にわたって親しくつき合っていた。

彼は修士課程では九州の南のトカラ列島で島民生活の生態人類学的調査を行っていた。篠原さんと私は春休みに、悪石島で調査していた掛谷さんを訪ねてしばらく滞在した。私は泳げないので、その後は東北の山村で調査をしたが、原子さんが助手として来られて五島列島の調査を始め、また加納さんたちが琉球大学に就職したこともあって、伊谷研究室の院生たちは次々と沖縄の島々で調査を繰り返して行った。

掛谷さん以前の伊谷研究室の院生はニホンザル

やチンパンジーを研究していたなかで、彼は人間の調査を始めた最初の院生だった。もっとも、伊谷さんに師事していた田中二郎さんは、東大の大学院に所属してすでにブッシュマンの生態人類学的調査を行っていたのだが。伊谷さんは、タンガニーカ湖西岸地域でチンパンジーの調査を開始して以降、院生たちとともに毎年繰り返していた広域調査では、調査補助に雇ったトングウェの男たちと一緒に広大な原野をサファリし、そしてその途中の湖岸や原野に点々と散在する小集落に生きる焼畑農耕民トングウェ族と接しているうちに、彼らの暮らし方と人がらにすっかり惚れ込んでいった。また、チンパンジーの餌づけに成功して単位集団の存在を確証し、その後も調査を継続していた西田さんもやはり、調査地のトングウェの人びとを敬愛していたようだ。こうしたことが背景にあって、掛谷さんはトングウェを調査することになったのだった。彼は1971年以降、〈ウッドランドにおける自然と人との関係〉を調査テーマとして、湖岸とマハレ山塊とその東に広がる原野のなかで自然に埋もれたようにして暮らす彼らの、生業形態が異なるいくつかの小集落を選んで、奥さんと一緒に住み込み調査を展開した。

そんな彼らの暮らしぶりを克明に調査し分析して、掛谷さんが見出したのが彼らの「最小生計努力」と「食物の平均化」の傾向だった。つまり、生計のための活動は必要の範囲内にとどめそれ以上には頑張らない。そして、まだ隣人が手を付けていない作物を導入したり、ほかの人がやらない活動をして新たな食物を獲得したとしても、その大半は他人に食われてしまうだけなので、そういうことはしない。その結果どの家族の食べ物も同じレパートリーになってしまう、ということである。これらのことは、彼らはそれぞれ頻繁にサファリをし、しかも旅程の途中にあるどの村でも寝食の提供を受けることができる、逆言すれば、村の人は旅人に寝食を提供せねばならぬという慣習に起因していたのだった。

掛谷さんはさらにその背後に、トングウェの心性のうちに身近な人への妬みや嫉みさらには呪いの感情が生じることを見だし、そして、彼らの

なかで特別な能力をもつ呪医がこうしたことに関わる見えない世界をコントロールしていることを知っていった。そこで彼は、トングウェの著名な呪医に弟子入りし、自らが一人前の呪医となるための一連の儀礼を受け、呪医としての知識を施されたのだった。

私はその後、伊谷さんの調査隊で原子さんが始めたイトウリの森のムブティ・ピグミーの調査に加わり、狩猟採集民の暮らしに初めて接した。そして1980年代にはずっと西の方のアカ・ピグミーの調査を行なった。彼らも必要以上には頑張らないことと、食物はキャンプ内のすべての家族が二重に分かち合うのでどの家族の食事も同じになってしまうことは、トングウェと共通していたが、掛谷さんが農耕民に見いだした妬みや呪い、呪術や呪医といったことは、ムブティやアカでは見られなかった。では、狩猟採集民たちが示す同様の行動パターンすなわち平等主義については、一般にどのように考えられているか？ この件についてはここでは省略する。

その後、トングウェたちはタンザニア政府の政策によって、原野や山中に散在する小集落に分散しての生活から、湖岸地域に集住し大きな集落をつくって農業を営むように転換させられた。自分たちの伝統から切り離された新たな暮らし方を受容せざるを得なかったのである。そして掛谷さんは、自ら構築した調査地の人びととの関係を失い、彼らの暮らしと文化の継続調査も不可能になってしまった。彼はその後、焼畑農耕民の新たな調査地を開拓し、院生たちと新たな研究テーマを展開していったことは周知のとおりである。ただ、彼の心にはかのトングウェたちがずっと生き続けていただろうと私は思う。

## 文化生態研究室の掛谷さん

西田 正規

1981年の春に私は筑波大学に赴任することになり、京大の自然人類研究室で一年先輩であった掛谷さんとまたご一緒することになりました。この大学は教員組織と教育組織が別組織になってい

て、始めそれが良く飲み込めなかったのですが、掛谷さんが「西田、これは芸者の置屋とお茶屋の関係とおなじや」と教えてくれました。彼の口癖を借りれば、まさに言い得て妙な説明でしたし、私はすぐ理解できました。そして同じ置屋となったのですが、お茶屋は別でした。

掛谷さんはいくつかのお茶屋を掛け持ちしていましたが、一番深く思い入れておられたのは環境科学研究科の文化生態研究室（文生）でした。当時はまだ初代教授の川喜田二郎先生がおられ、ゼミでは川喜田さんが壮大な夢を語り、それを受けて掛谷さんが学生を励ますように展開する、その掛け合いが絶妙で、私はもぐりでこのお茶屋に通うことになりました。

公害問題への関心の高い時期でもあり、文生に集まる学生さんはだれもが意欲的でパワフルでした。それが二人のパワフル教官にあおられたので、すこぶる熱い研究室でした。川喜田先生が次の春に退官されて掛谷さんが二代目教授になってからも熱いフィールドワークが文生の命でしたが、しかし掛谷さんの影響が浸透するとともに、フィールドの実情を理論化して言葉にすることに、みんなが夢中で取り組むようになりました。

掛谷さんがタンザニアのトングウエ社会で見出した平準化、あるいは平準化システムは文生研究室のシンボリックな言葉でした。だけど院生たちが出会うさまざまなフィールドの理解には、平準化だけでは足りません。それぞれがフィールドで出会った事象を、あのようにかっこいい言葉で表現してみたいと誰もが必死になるのは当然のことでした。

ある時のゼミで、本来なら面倒な仕事だけど、文句も言わず自ら進んで参加して、しかも楽しんでいるという事例が議論になりました。人を鼓舞している具体的な行動が検討された上で、誰かがそれをまとめて「盛り上げシステム」と呼んだのが全ての始まりだったと思います。人は人に触発されて力を発揮しながら元気になる。これは当たり前のことと言えはその通りですが、だけどその言葉を文生のみinnで見つけ出したという喜びや誇らしさが伴っていて、それでまたゼミ中が盛り上がるという事態になったのです。

その頃はまだディスコが流行っていて、週末のゼミ室がしばしばディスコ会場になり、ついにはゼミ室の天上に誰かの足跡(?)が残ることもありました。盛り上げシステムがどのように機能するのか、言い出しっぺの院生たちが自らそのように盛り上がりながら言葉の意味を再点検していたのだと思います。

そのような時に、ゼミの打ち上げで那須の北温泉に出かけたのです。着いてみると深い雪の中にプールのように広い露天風呂がありました。それを見て文生はすでに盛り上がってしまいました。さっそく宴会になり掛谷さんも院生もみんなニコニコ、急ピッチでお酒も料理も空になってしまい、そして次はあの温泉プールで飲むことになったのです。温泉、温泉と言いながら温泉に向かったのですが、お兄さんもお姉さんも、みんな広い露天風呂に入ってしまったのです。暗い屋外のことだけど、混浴は誰もが始めて、だけど盛り上げシステムで武装していた文生ですから、そんな所でビビったりすることもなく、すんなり混浴になったのです。

後に掛谷さんは「西田がな、おい風呂行こかと言うたら、みんなついて行きよった」と、まるで私が混浴をそそのかしたかのように言っておられましたけど、それは濡れ衣です。元はと言えば、分かりにくいもやもやした所に言い得て妙な言葉を見つけては、そのカッコよさで学生さんを夢中にさせてきた掛谷さんがいたからの事。盛り上げシステムという言葉が出た時に、掛谷さんが満足そうにニヤニヤしなかったら、この混浴もあり得なかったと思うのです。

当時まだ生態人類学研究会に女性メンバーは少なく、文生の女性メンバーの活躍は際立っていました。このすぐ後に九州で生態人類の大会があったのですが、この時は、男性メンバーが占拠していた露天風呂に文生女性メンバーが突入してしまい、みんなニコニコの大騒ぎになったのです。

## 白浜での掛谷さん

山本 佳奈

### 京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科

掛谷さんにお会いするのは久しぶりであった。2012年の秋に体調を崩され、翌春の3月に滋賀で開催した研究会には、お誘いしたけれども療養に専念するといってと欠席された。それから8カ月たった2013年11月、体調もよく遠出も可能だといっ、研究会に参加するために和歌山県白浜町までやってきてくれた。

白浜は理学部時代に海洋実習で来て以来だと、宿に向かうタクシーでおっしゃった。研究会の会場は素泊まり宿であった。日程が直前に決まったうえに、秋の行楽シーズン真っ只中だったため、会議室をそなえた宿はどこもいっぱい、なんとか確保できたのが素泊まり旅館の食堂であった。

私は共有資源（コモンズ）に関する論文の構想を発表した。掛谷さんからは、「なんでコモンズなんや」ということをもっと深く考えなくてはならないとコメントをいただいた。雑誌『アットプラス』の赤坂憲雄と柄谷行人の対談を引用され、「津波の被害を受けて泥の海（潟）に還ってしまった東北の水田を、もういちど個人に分割して水田にするのではなく、コモンズとして共同管理し、自然エネルギーのファームとして利用しようと赤坂憲雄が提案していた。コモンズは東北の課題とも絡んでいる。日本とタンザニアの関連性も意識しつつ、もっと緊張感をもって考えなあかん」とおっしゃった。

掛谷さんは東日本大震災のあと、日本社会の課題とアフリカ研究のつながりについてよく言及されるようになった。伊谷樹一さんのとりくんでいる「らせん水車」も、エネルギーの地産地消や適正技術という観点から注目されていた。同時代的感覚を研ぎ澄まして議論しなくてはならないともおっしゃられた。

夜は海鮮料理屋へ行った。掛谷さんのここ数年お気に入りである「塩ごはんの話」が出た。無精者の私がかつて朝食に食べていた「塩ごはん」がなぜか掛谷家で話題になってしまったようだった。「女房が塩ごはんを気に入ってしもうてな。塩に

もこだわってるで。今は味噌汁とごはんか?」「はい、塩はやめて、ふりかけです。「女房はふりかけは絶対拒否しおるで。味噌汁はだしとってるんか。「いいえ、粉末だしです」。私は研究会から帰ったあと生まれてはじめてかつおだしをとった。

1年に2回はタンザニア・チームで集まってきた。泊りがけの研究会でも、掛谷さんはほどほどの時間で「じゃあ、お先に」とご自分の部屋に戻られた。けれども白浜では、海鮮料理屋から帰ってきたのが夜遅かったにもかかわらず、二次会会場の黒崎龍悟さんと加藤太さん部屋にいくと、掛谷さんが座敷机の前に座っておられた。

寝そべってテレビを見ていた伊谷さんはしばらくするとそのまま畳の上で寝てしまい、黒崎さん、加藤さん、私の30代3人と掛谷さんという珍しい組み合わせで夜のひとときをすごした。掛谷さんは「じゅうご、じゅうろく、じゅうしちと〜、私の人生暗かった〜」と藤圭子の歌をうたいながら、彼女のデビューがいかに衝撃であったかを語ってくれた。また、大相撲の九州場所の生中継を英子さんと毎日欠かさず見ているという話もされた。力士が通る花道のすぐそばで、すごい着物美人が毎日必ず同じ位置に座っているのを発見したとかで、中州の高級クラブの女将にちがいないと、その美人を英子さんと毎日チェックしているということだった。

そろそろお開きかなと思った頃、黒崎さんが掛谷さんになぜ開発実践をやろうと思ったのですかと尋ねた。「90年代のプロジェクト時代に、樹一から3人の若手に『掛谷さん逃げないでしょうね』と詰め寄られたんや。わしはちょっとだけかかわったら、あとは自分の好きなことやったろうと思ってたんや」とおっしゃった。そんな意外な話もあつたりして、結局2時ごろまで私たちは飲んでいた。

次の日は、朝早くから研究会の続きをして、南方熊楠記念館を訪れたあと現地解散になった。同じ方面だったので掛谷さんと一緒に特急くろしお号で新大阪まで出たが、掛谷さんはそのあいだアイマスクをしてずっと寝ておられた。きっと体力的にかなり厳しかったにもかかわらず、私たちと過ごす時間を大切にしてくださったのだと思う。

本当に感謝している。

## 10年分の先輩、掛谷誠さんを偲ぶ

片山 一道

掛谷さんとの交わりは、およそ半世紀に及んだ。最近でこそ、たまに会うだけだったが、はじめて出会いし頃は、同じ屋根の下で起居していた。生物学的な年齢では、掛谷さんのほうが1学年歳上だが、実際には10ヶ月ほどしか違わない。同じ1945年だが、彼は敗戦前、私は敗戦後に生まれた。しかしながら私の意識のうえでは、10年かそこら、あるいはそれ以上の先輩であった。そんな事実と意識とが交差する間柄だった。

過日、「掛谷誠さん 追悼の集い」が開催された2014年3月22日のこと、小生の「庵」に遠来の客(K氏)が泊まった。夜なかから夜更けにかけて、この庵でアイリッシュ・モルトの「ジェイムソン」を献げつつ、夜を徹するほどの勢いで語り合った。半世紀ほどもさかのぼる怪しげな記憶を、二人でたぐり寄せながら、掛谷さんのことを追想したような次第である。つらつら思うに、私たちの周辺には50年前の頃、来る日も来る日も、そんな光景があった。歳月が遠くなり、もちろん詳細なことは忘却したが、たしかに夜を徹して酒盛りし、談論風発、語り合い、そのまま炬燵で沈没。そんな生活を繰り返してひろげていた。二人だけのこともあり、大勢のこともあった。

私の個人史では、「山翠荘(あるいは山水荘だったか)時代」と呼ぶ。山翠荘とは、私たちの学生下宿のこと。上賀茂神社から南へ徒歩5分ほどのところにあった。そのころはまだ、葵祭のときなどをのぞくと、観光客は多くなく、京都産業大学もなかったもので、長閑なもの、周りに野菜畑が広がっていた。

在地の「すぐき」製造農家が学生下宿を始めた。2階建ての長屋風の建物は4畳半か6畳の個室に分かれており、20人ばかりの下宿生がいたように思う。朝食と夕食が賄い付き、家賃は8千円ほどであった(値上がりがあった)。こんな学生下宿、いまどき珍しいだろうが、当時は少なくなかった。

この山翠荘に私は、大学に入ってすぐに入居した。新築だったように思う。掛谷さんやK氏らが入居されたのは、その1年後ほどだっただろうか。つまり、私は2回生のとき、3回生の掛谷さんたちと知り合った。

その頃の掛谷さんは、まるで怪人がごとき雰囲気であった。その風貌がなんとか、ではないのだが、いかにも怪しげな生活をしてきたからだ。どうも朝食のあと、昼間は寝ているようなのである。そして夕食のあと、ときどき外出しはる。あとは、今でいう「閉じこもり」状態だった。すぐに判ったことだが、実際に掛谷さんは夜行性の生活のさなかにあった。その年は大学を留年すると決め、読書まみれの日々を送っていたのである。

ときどき私たち何人かの下宿生は、夕食後かわるがわる、誰かの部屋に沈殿。さきに述べたような時間を過ごした。そのサロンのメンバーは、掛谷さんの同学年と私らの学年が、それぞれ3人ほどだっただろうか。それに客人が混じったりした。私が驚いたのは、ほかの誰よりも掛谷さんだった。ともかく理路整然、当意即妙、快刀乱麻の語り口。私ら地方から来た者には、なんととも眩しい存在だった。「ハイライト」という煙草をバカバカと吸ってはった。

しばしば「これ、知ってるけえ」の口癖で始まり、読書のことを話題にした。けっこう小難しい哲学書の類が多かったが、いきいきと紹介することに長けており、他の追隨を許さなかった。いまでも鮮明に思いだすのが、九鬼周造の『「いき」の構造』であり、森有正の著作類などである。さらに谷川雁の著作なども印象に残るが、これは後のことか。ともかく掛谷さんの解説を通すと、誰もが読みたくなり、実際に読んだものである。まるで伝道師のようだった。おかしいこともあった。「そろそろ寝よか」となる頃、「行くけえ」(疑問形)、あるいは「行こけえ」(提案形)の独特の口調でと誘われることがあった。なにに誘われるのか。夜中の山歩きである。一升瓶をもち、大きなザックを担いで、近く山に出かける。下宿を出て、1時間の藪こぎをして、北山のどこかで小テントを張り、そこで酒盛り、そして寝袋でお休み

となる。次の朝、叡電の一番近い駅から大学に向かう。今なら猪などが、百鬼夜行であろうが。

掛谷さんは、大学を休校、留年することに、伝染源のような役割を果たした。その下宿サロンのメンバーは、結局、次々と留年することになった。彼の1年の暮らしぶりを見ているうちに、なんと有意義なことなのだろうと錯覚、留年に対する抵抗感のようなものが消え失せていったようだ。

私自身も大学3回生のときに留年。北アルプスの蝶が岳の山小屋でアルバイトをしながら暮らした。さらには1970年、大学闘争の終わり頃、奄美大島に住み着いて、そこで1年ばかり、遠流の身のようにして過ごしたことがある。このときの経緯においても、実は、掛谷さんに御世話になった。ともかく掛谷さん、ありがとうございました。お休みなさい。

合掌

## 掛谷さんの退職記念パーティーのこと

池野 旬

### 京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科

私は1997年1月に京都大学大学院人間・環境学研究科アフリカ地域研究専攻に助教授として赴任し、掛谷さんと一緒に仕事をさせていただくようになった。掛谷さんは同じ講座の教授でおられたので、直属の上司ということになる。掛谷さんが「生態経済論Ⅰ」を、私が「生態経済論Ⅱ」を担当した。担当することになっていながら良く理解しておらず、「生態経済論とは、どんな学問ですか？ 物質循環収支を扱うような学問ですか、それとも環境経済学のような学問ですか？」と、掛谷さんにお尋ねしたことがある。それに対して掛谷さんからは、「君がこれまでやってきたことを教えたらええんや」というありがたいご神託をいただいた。それ以来、掛谷・池野コンビが池野・高田コンビに変化している今日まで、自分の研究遍歴を学生に説いてきた。掛谷、高田、池野とかなり方向性の異なる教員の教える「生態経済論」の共通項を読み取るのに、学生諸君は四苦八苦していることだろう。

さて、世の常とはいえ、2008年3月に掛谷さん

も63歳（当時の京都大学の停年退職年齢）を迎えられることになった。会場を確保しておく必要があるため、最終講義と停年退職記念パーティーは1年ほど前から準備を始めなければならない。しかしながら、掛谷さんはつねづね、「停年退職パーティーという虚礼はそろそろ考え直さないといけない」と発言されておられた。掛谷さんを身近に見知っておられる方は納得されることと思うが、掛谷さんはそんな発想をされる先生である。掛谷さんのやや華奢の体型からは想像しにくいところもあるが、精神的にはいたって質実剛健であり、質素を信条にされている節があった。「退職パーティーは不要」と掛谷さんが言われたなら、それは掛谷さんが遠慮してそう言われているのではなく、心底そう確信されているということである。京大理学部を卒業された掛谷さんは京大アフリカ研究の中心的な人物であり、同僚の多くは先輩・後輩として、あるいは師匠・弟子として、私よりも長らくそして深く掛谷さんとおつきあひがあり、私が指摘するまでもなく掛谷さんのこのような性格を熟知されておられた。わずか10年ほど仕事をともにさせていただいた私は、掛谷さんと関係の薄い同僚であり、そして幸か不幸か学問的出自を異にしており、さらに掛谷さんが教授を務められている講座の准教授であることから、掛谷さんに「鈴をつける」役回りは、暗黙のうちに私に回ってきていたように感じていた、これは私の被害妄想かもしれないが。

2007年4月の某日、掛谷さんの研究室に1人で伺い、一蹴されることを心配しながらも、「最終講義に続いて退職記念パーティーを行いたいが、いつごろがよろしいか」と切り出した。案の定、「最終講義はもちろん行すが、退職記念パーティーはいらぬ」ときっぱりと否定されてしまった。ここで引き下がっては機会を失うと思い、咄嗟に口をついたのが「掛谷さんはそれでよろしいかもしれませんが、我々後輩が困ります。なんとか我々のためにパーティーを認めてください」という趣旨の発言であった。こんな一言で翻意される訳もなく、そのあともウダウダと泣き落として、後輩思い・学生思いの掛谷さんはようやく、「こじんまり



としたものなら」と同意くださった。そして、掛谷さんは過度の華美を嫌われ、最大の部屋でも120名程度しか収容できない京大会館をパーティー会場に指定された。2014年3月の偲ぶ会にお集まりいただいた皆様の人数からもわかるように、120名程度ではパーティーの招待客をかなり絞り込まないといけなかった。その点を掛谷さんも悩まれておられたが、最終的には実行委員会の判断で絞り込ませていただいた。当然お声をかけるべき方を網羅できていなかったことを、この場を借りて再度お詫びしておきたい。

退職記念パーティーは、掛谷さんを慕う事務職員諸氏、大学院生諸君の尽力で非常に盛り上がったものになった。なかでも、大学院生諸君による、タンザニアのトングウェを題材にした創作ミュージカル(?)は、掛谷さんの琴線に触れるところがあつたようである。演じ終えたあとに掛谷さんを囲んで出演者全員で撮った記念写真が私の手元にあるが、掛谷さんをはじめ皆が、これほどうれしそうに笑えるものかと思えるほどの満面の笑みを浮かべている。そして、場所を換えた二次会の席で、掛谷さんがふともらされた「池野、なかなかえーもんやな」は、最後の最後に掛谷さんにお褒めいただいたと、私にとって忘れることのできない一言になっている。

## 掛谷を偲ぶ ―生態人類学を目指した同世代の友として

大塚 柳太郎

掛谷と僕は、ともに昭和20年の早生まれで、まさに同時代を生きてきた。同時代の感覚は、時間そのものというより、生態人類学に対する思い入れにかかっている。掛谷は学部学生から大学院生にかけて、京大人類進化論教室で、助教授だった伊谷純一郎さん、大学院生だった西田利貞さんや加納隆至さんたちが霊長類のフィールドワークを華々しく展開していた時、ヒトを対象とするフィールドワークを目指した。もちろん、伊谷さんも狩猟採集民、牧畜民、農耕民への関心を強くもたれていたし、田中二郎さんが京大卒業後に東大文化

人類学教室とハーヴァード大に籍を置き、1967年にはブッシュマン調査に着手されていたものの、掛谷の挑戦は新鮮だった。僕自身は東大人類学教室で、それまで皆無だった「生きているヒト」のフィールドワークを目指していた。

掛谷との最初の出会いは、多分、修士の大学院生の時だったと思う。その時も、それ以降も会う度に話ははずんだ。もっとも、杯を酌み交わしながら延々と話したのは覚えているものの、具体的に何を話したかはほとんど覚えていない。少なくとも僕にとっては、掛谷が考えることが僕が考えることに近かったので記憶に残りにくかったのだと、今でも勝手に思っている。「考えることが近かった」ことで思い出すのは、掛谷も僕もまったく別々に、国内ではトカラ列島で調査したことだ。それも、平島(掛谷は隣の悪石島と2島)を調査地に選んでいる。掛谷と僕は、民宿もなかった平島と一緒に滞在したことはないものの、「長ジイ」と呼ばれた日高長之助さんをはじめとする村人に世話になりながら、多くのことを見聞き多くのことを考えた。2年前に掛谷と京都で会った時、2人で「長ジイ」を訪ねたいと話したのに叶わなかった。掛谷に先立つように、「長ジイ」も逝ったからだ。

生態人類学会の前身になる生態人類学研究会の最初と認定された集まりは、1973年5月28日に東大横の学士会館分館で開かれた。この集まりの記録は、当時は東大人類学教室に勤めていた西田さんにより生態人類学会ニューズレター第1号に残されている。この集まりでは8名が発表した。僕は「ニューギニア・オリオモ地方のパプア人の生業活動」を、掛谷は「トングウェ族民族誌—The Aspect of Subsistence Ecology」を発表した。2人とも、それぞれが1971年から行った最初の海外調査に基づくものだった。

その後、掛谷と僕は調査地がアフリカとニューギニアと異なるものの、一緒にエッセイや著書の刊行にかかわる機会をもつことができた。

最初は、前述の生態人類学研究会の発表がきっかけだった。その時、僕は東大人類生態学教室に勤めていたが、その先輩の1人がこの研究会の話

を聞き、彼の紹介でエッセイの執筆依頼が舞い込んできたのだ。依頼の内容は、世界各地に暮らす人びとについて、フィールドワークに基づく生の姿を伝えてほしいとのことだった。2人のエッセイは、1975年に刊行された日本評論社刊『からだの科学』63号と64号に掲載された。

ついで、至文堂の『現代のエスプリ』に「生態人類学」の特集を組みたいと、文化人類学者の祖父江孝雄さん（故人）を介して打診があった。僕はすぐに、当時筑波大に勤めていた掛谷に相談した。彼は、「生態人類学研究会のメンバーが沢山増えたんだから、ともかく引き受ける」と一言。1983年に出版された『現代の人類学—生態人類学』は、フィールドワークの雰囲気が漂う16編からなるエッセイ集になった。掛谷が書いた「妬みの生態人類学—アフリカの事例を中心に」は、トングウェの生業適応にはじまり、自らがトングウェの呪医になった経験を踏まえ、彼らの精神世界までをスコープに展開した力作だった。

その後も、僕は掛谷と協働する機会に恵まれた。福井さん（故福井勝義氏）が代表者として行われた民博の共同研究会の成果に基づき、雄山閣から刊行された『講座「地球に生きる」』では、掛谷が第2巻「環境の社会化」、僕が第3巻「資源への文化適応」の編集を担当し、両巻とも1994年に出版された。ついで、原子さん（故原子令三氏）が逝去され、ご遺族からの寄付を得て京大学術出版会から刊行された『講座・生態人類学』全8巻では、掛谷が第3巻「アフリカ農耕民の世界—その在来性と変容」、僕が第5巻「ニューギニア—交錯する伝統と近代」を編集した。出版はともに2002年のことだった。

思い起こすと、10年おきくらいに掛谷と生態人類学をテーマとする著作にかかわってきた。残念ながら2010年代に協働作業はできなかったが、彼が伊谷樹一君と編集した『アフリカ地域研究と農村開発』が2011年に京大学術出版会から刊行された。その中で、彼のフィールドワークへの想いと、彼自身がトングウェに抱いていた想いが述べられている。読み直し、改めて嬉しかった。

冥福を祈る。合掌。

## 掛谷さんを想う

今井 一郎  
関西学院大学

掛谷誠さんは、私の調査研究の要所で私を励まし、手を差し伸べて下さった師であった。彼は、私が京大生の頃すでにトカラ列島での調査やトングウェ族の生計維持機構の論文を公表されていた。当時の私は、初めて「生態人類学」という領域に接し毎日のように先達の文献を読み漁っていた。私は掛谷さんの論文を読み、「遠方に住む得体が知れない存在」だった民族の暮らしが次第に解き明かされていく様を目の当たりにし、気持ちが大きく揺さぶられた。

1980年度の科研費（伊谷純一郎隊）・アフリカ調査チームでは、調査地は異なった（掛谷さんはザイール、私はケニア）が、掛谷さん夫妻とはナイロビまで同行しお世話になった。その後何よりも有り難かったのは、私がナイロビの事故によるショックから未だ立ち直れずにいた頃、掛谷さんと市川光雄さんがザンビアの科研費調査隊（1983年）に受け入れて下さったことである。当時の私にとり調査研究の立て直しは至上命題であり、願ってもないチャンスを与えて下さったのだ。私の調査研究対象はザンビアの湿原漁撈民に移り、現在までアフリカの湿原漁撈活動の調査研究を続けることができたのである。当初、掛谷さんからは「ワシらはザンビアの農耕民調査をやるから今井は漁撈民研究をやれ。」と言われた。一方の私は農耕民の暮らしの一部としての漁撈と位置付けたため、その点では二人の議論・認識がじっくりかみ合わなかった。

その後掛谷さんは、筑波大学から私が勤務していた弘前大学（人文学部・人間行動コース）に田中二郎さんの後任として赴任してこられた。彼には、田中二郎さんの指導のもとで始まった「人間行動コース」の津軽研究、弘前研究を継続・発展させようという熱気が常に感じられた。掛谷さんは、私たちに「まず言葉からマスターしよう」と声をかけた。ただちに人間行動コースの津軽地方出身学生を講師にした「津軽弁講座」が始まり私も参加したが、さまざまな理由から長続きしなかつ

たのは残念だった。他にも、掛谷さんは食欲に弘前の街と津軽地方を理解しようと努めておられ、私たち教官は強く刺激された。掛谷さんのグルメぶりはつとに有名だが、彼は着任早々に弘前の街なかを探索し私たちが全く知らなかった店を次々に発見しては連れて行ってくれた。それは、居酒屋、蕎麦、天麩羅、寿司や会席など多方面にわたっていた。掛谷さんは、弘前の街を食の面から楽しみ学ばせてくれた恩師でもあった。

私は、村落の調査研究手法の点でも掛谷さんから多くのことを学んだ。人間行動コースのスタッフが掛谷さんをリーダーとして白神山地周囲に分布する村落調査を始めた1980年代後半当時、白神山地域は「春秋林道建設問題」に揺れていた。私たちは、林道建設問題の議論からは一定の距離をとりつつ、高度経済成長期前後の住民生活の変遷をたどる調査研究を進めていった。掛谷さんとコースの教官たちは、学生実習（実験演習）の一環として学生諸君を引率し、白神山地周囲の集落を何度も訪問して住民の皆さんから聞き取り調査などを実施していった。西目屋村、鱈ヶ沢町・旧赤石村地区、岩崎村、藤里町など白神山麓の集落で調査資料を収集し、「白神山地ブナ林域における基層文化の生態的研究」（1990年）という冊子にまとめられた。私は、掛谷さんに同行して観察・活動する中で、得難い体験することができた。参加した学生の中には、聞き取り調査で村人の協力が得られず落胆した面持ちで宿に戻って来た者もいた。掛谷さんは、夕食後に行なう各班の報告の場で目頭が赤く慚然たる面持ちの学生がいても、彼独特の話術によって彼らを鼓舞するのだった。すると、学生たちの瞳は次第に輝きを取り戻し、翌朝は再び聞き取り調査に出かけたのである。まさにそれは魔（呪）術であった。

最後に、私には掛谷さんから徹底的な論文指導を受けたことが忘れられない。『ヒトの自然誌』掲載のためザンビア・バングウェウル湿原の漁撈活動の原稿を掛谷さんに読んで頂いたのである。掛谷さんはすぐに一読して「こんな物ではいかん！書き直せ。」と私の机の上に朱の入った原稿を投げ出された。私が改編して見せても、再び「文章

がバラバラで繋がらない」などの厳しい指摘を受けて書き直すことになった。何度もやり取りするうちに、私も「最後まで付き合ってもらいますよ」と覚悟を決めた。当時の掛谷さんは弘前と京大等を行き来する多忙な日々を送っておられたにもかかわらず、私はお構いなく原稿を手に研究室のドアを叩いた。掛谷さんはその都度丁寧に読み直し、コメントして下さった。最後に私の肩を揺すりながら、「これで良い論文になった。よう頑張ったなあ。俺もへトへトや…」と言われた時の、掛谷さんの安堵した表情が忘れられない。私は彼に大きな負担を強いたことを、今でも申し訳なく思っている。

掛谷さんの早い旅立ちに茫然たる思いである。

## 追悼山行

斎藤 清明

「追悼の集い」からひと月後に、「追悼山行」と銘打って、篠原徹、佐藤俊さんと三人で京都郊外の低山に出かけた。予報では昼過ぎからは雨とのことだったが、ゆっくりと昼からバスに乗った（夕方から飲むのに間に合えばいいのだから）。案の定、下山時には降り出したが、「春雨じゃ、濡れていこう」と、意に介さずに。緑したたるなかにツツジが鮮やかで、彼との半世紀にわたる付き合いを語り合いながら、歩きとおしたのだった。

私が彼を知ったのは、三回生になった一九六六年の新学期のこと。植物学科の講義を聴きに行ってからである。受講生は少なく、すぐ顔見知りになり、その中には（渋谷）英子さんや篠原氏もいた。

そうして、掛谷氏とよく話すようになったのは、その夏の臨湖実習からだった。琵琶湖実験所に泊まりこんでの実習だったのだが、農学部（農林生物学科の単位にもなった）からは私一人だったから、ちょっとよそ者のような感じがしていたのだが、「おい、斎藤、どうや」。まっ先に声をかけてくれたのだった。

あこのころ、生物系の学生にとって、勃興しつつあった分子生物学が魅力的におもえたものだった。

今西錦司に憧れて農林生物学科に入った私だが、その方向に傾きつつあったのだが、彼は人類学ひと筋のようだった。「人類学者はなあ、詩を書かない詩人なんやで」という名文句を、そのころに彼から聞いたようにおもう。

彼のようにストレートに大学院にはいかずに、私は南太平洋に半年間遊んだりして留年。そして、教育学部に学士入学した。同じく篠原氏も文学部（考古学）にやってきて、隣の建物（陳列館）になったので、よく訪ねていった。そうして、夕方になると、そろって人類学教室のたまり場へ遊びにいったものだ（その後は、赤垣屋などへ飲み）。

トカラ列島で調査していた彼を訪ねていったのも、そのころだった。平島の日高さん宅に住み込み、その調査をもとに彼は修士論文にまとめたのだが、それが生態人類学の始まりだと、のちになって聞いた。それよりも、夜になると「白波」を飲ませてくれたのが、うれしかった。それが、私にとって焼酎の飲み始めとなった。

ある日のこと、日高さんの山羊がケガした。そのとき、彼はほんとうに親身になって、日高さんを慰めていた姿が、いまでも思い浮かぶ。やさしい男だった。

大学院入試の「滑り止め」と称して、佐藤俊さんら何人かと毎日新聞の入社試験を大阪へ受けにいった。試験会場は天王寺で、美章園の彼の実家が近かったから、試験後に呼んでくれた。慰労してくれたのだった。

まあ、全員討ち死にやろな、といわれたのだが、どういうわけか、小生だけが受かってしまった。そうして、みんなと違う世界で仕事をするようになった。

やがて、新米記者のころ、ライバル紙（朝日）に「私はアフリカの呪術師」になって登場した彼の姿に、目を見張ったものである。

そんな、なつかしい姿が走馬燈のように思い出された「追悼山行」であった。

最後に、いま思うと残念なのは、生前に彼が書いたものをほとんど読む機会がなかったことだ（篠原氏とは対照的に）。「まあ、そのうち読ませたる」と笑われそうだが。

## 掛谷さんの思い出

北村 光二  
岡山大学

掛谷さんにかぎらず、亡くなられた先輩についての思い出を書くということは、自分が若かったころのことを具体的に思い返さなければならなくなるわけで、そのような作業は、今の私にとっては、取り掛かるのがひどく億劫に感じられるものになってしまう。もちろん、思い返そうとすれば、いろいろな情景が浮かんで来るが、そのそれぞれはごく断片的で、それらが何か一つの「お話」になるものだとはどうも思えないのである。

今回も、書くとしたら何を書くのだろうかと思案してみても、人に言うほどのことが思いつくとは思えないという気分だったのだが、それでも思い直して何度か取り組んでみて気づいたことがあった。まず、昔を思い返すことに対して私が臆病になっているのは、あの時代、つまり大学闘争とそれに続く混乱の時代の私が、周りの人々にとって、どう扱ってよいかわからないとらえどころのない存在に見えていたのではないかと思っているかららしいということである。そう気づいてみて、掛谷さんとの関係を思い返してみると、それが他の先輩たちとの関係とは全く違った特別なものであったことがくっきりと浮かび上がってくるのである。

私をはじめとして私の同級生たちは、さまざまな事情があって、多くの先輩たちから扱いづらい厄介な連中と見なされていたことは確かだと思える。それと同時に、この連中を指導し、教育するのは掛谷の役目だろうと思われていた節がある。そして、周りがどう思っていたかということは別として、掛谷さん自身が、私たちの相談役、ないしは、後見人の役目を自分から進んで、自覚的に引き受けてくれていたのではないかと思えるのである。思い返してみると、あの当時、さまざまな機会をとらえて、私たち「ガキ」の不安や不満をわざわざ聞き出して、反抗的な気分や屁理屈を応援してくれたり、行き過ぎに対して忠告してくれたりしていた。

だから、弘前大学にいたときに、二郎さんの後

任に掛谷さんが赴任してくると知った時には、まさかそんなことになるとは思ってもいなかったということもあって、うきうきとした気分になっていたことを思い出す。弘前時代も、私は相変わらず、掛谷さんに議論を吹っ掛けたり、相談に乗ってもらったりしようとしていたのだと思えるが、さすがにそのときは、もう「ガキ」と先輩との関係というよりは、職場内の上下関係のある同僚の関係であり、当時掛谷さんが代表者をしていた科研費「白神山地ブナ帯域における基層文化の生態史的研究」の研究分担者として、掛谷さんの言い方では「地域研究の研究者」としての手ほどきを受けるということになっていた。しかも、ほんの3年半という短い滞在であっけなく京都に戻ってしまい、期待に胸を膨らませていた特別な時間はあっけなく終わりを迎えるということになった。

その後も私は、見果てぬ夢を追い求めて、会う機会があるたびにあれこれ相談に乗ってもらったり元気づけてもらったりしようとしたのだと思えるが、掛谷さんの側はもういいということだったのだろうと思う。そして、その後は掛谷さんとの関係はずいぶん疎遠なものになってしまった。そういうこともあって、掛谷さんとの思い出を書けと言われても、何を書いたら良いのかわからないという、この文章の最初に書いた気分を思わず抱いてしまうということになったのだろうと思える。ただ、長い時間を見渡すという広い視野を確保してみれば、掛谷さんとの関係は私にとってはひどく特別なものだったのだと確信できる。

いまさらで恥ずかしいのですが、掛谷さん、ありがとうございます。

## 掛谷さんとの思い出

島田 周平  
東京外国語大学

私は京都大学で11年間（1997年から2008年まで）掛谷さんの隣の研究室で過ごした。学生の指導などで私の研究室で話し込むことはあったがそこで深夜まで話をしたことはあまりなかった。肺気腫で体調が万全でないということに気にして

遠慮していたこともあるが、何よりも家路が同じだということで、すぐに「ほな、一緒に帰るか」となってしまうのであった。伊谷（樹一）さんの研究室では徹夜も辞さず元気に学生の指導や研究会をやり、「掛谷さんが一番元気やった」という話が伝わってくることもあった。しかしその時はきまって数日後に「若いモンと一緒にだと疲れるわ」と聞かされるのであった。身体は必ずしも喜ばないところがあったのだろう、しかしそれにも増して若い人と話すことが掛谷さんには心楽しいことだったのだろうと思われる。

研究指導の場では、学生に一言「アカン」とにべもない言葉を発する掛谷さんであったが、帰路の電車の中では「ちょっときつかったかな？」と言われるのであった。そんな車中、若い頃の話をよく聞いた。そんな時は、「何も思うようには行かんかったな。でもそこが面白いんやな。」と感慨深げな締めくくりで終わるのが常であった。掛谷さんの若かりし頃の話を知ると、確かに魅力的だが転機の多い人生だったと思う。「最近の若者は、何やよ一分からん。でも自分らもきつとそーやったんかいな？」という言葉には、幾つもの転機を乗り越えてきた自分の過去を振り返り、それを突き放してみたような達観した気持ちが伺われるような気がした。

単身赴任の私に向かって、「そやけど君、夕食毎日作っとんかいな。大変やな。何作っとんや？」と聞かれるので、作った献立を二、三挙げると「そりゃ食事やないな、エサやで」と的を得た言葉を吐かれる。「君が行っているナイジェリアな、面白そーやけど行く気はあまり起こらん。あそこ、偉ぶってるやろ。ワシ、大国主義っちゅうのが嫌いなんや。」掛谷さんの言葉はテンポが良くて真実を突くところがあって心地が良い。

掛谷さんが私の研究室に来て少し長く話し込んだことがある。私がまだ京大の「風が読めない」新参者の頃のことである。私が会議の席上少々生意気な意見を述べた後のことである。掛谷さんが私の考えをもっと聞きたいといって研究室に来られた。私が思っているところを率直に述べると掛谷さんはそれを静かに聞き、最後に「島田の言う

こと、ヨー分かった。勉強になった。そやけど、それズーッと守りなや。」と言われた。

守るべき「それ」が何なのかよく分からなかったのであるが、この話し合いのあと掛谷さんは恐るべき大先輩から話しが分かってもらえる暖かい先輩となったような気がする。そして現役最後の頃には何でも相談できる身近な先輩になったような気がする。研究科長時代には、わざわざ宇治駅前のお茶店にまで出てきてもらい私の相談事を聞いてもらったこともある。本当に大切な先輩であった。感謝の意を告げることも出来ず急にお別れすることになったことが残念でならない。

最後に、掛谷さんがいつも言っておられた言葉をそのまま掛谷さんに捧げ、お礼の言葉としたい。「昔の人は偉かったちゅことや」

## 掛谷さんの影

木村 大治

### 京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科

掛谷さんの追悼文集の連絡係になり、みなさんから届いた原稿を読ませていただいている。それぞれの形で濃密な、掛谷さんとのつきあいが書かれているのを読むと、とてもうらやましい気持ちになる。というのは、私は掛谷さんとフィールドを共にしたり、直接研究指導を受けた経験を持たないからである。しかし、私のこれまでの研究生生活は、不思議に掛谷さんの跡をたどり、そしてその影を踏もうとする、そんなふうだったのである。

京大理学部・人類進化論の大学院に入り、トカラ列島の調査をすることになった。そこは、掛谷さんが修士論文を書いた場所だった。調査地・平島の夜は焼酎の世界になる。私は家を回って話を聞き、酔っぱらうとその場で寝てしまうという生活を続けていた。そんなとき頻りに「カケヤは、飲んだど〜」という声を聞いたのである。(ちなみに、「オオツカは、飲んだど〜」という声も、同じかそれ以上に聞いたのだが。)一年先輩の澤田さんから、掛谷さんがトカラで調査しているときに、生態人類学とは、という問題に悩み、砂浜に「生態人類学」と書いて、打ち寄せる波がそれを消す

のを眺めていた、という話を聞いたことがある。出来すぎた話なので嘘だろうと思っていましたが、かなり後になって掛谷さん本人の口から「ワシは平島でな」とその話が出てきて驚いた。それでもなお、本人の作り話という疑いは消えないのだが、わが国の生態人類学の確立に心を砕いていた当時のことを、掛谷さんは照れ混じりに語ったのではないだろうか。

その後私はザイールに行き、博士論文を書いてなんとか就職を果たしたが、そこは掛谷さんが初代の文化人類学の教官として赴任した福井大学だった。掛谷さんが筑波に移った後、寺嶋さんがそのポストに入り、寺嶋さんあとに私を取ってもらったのである。私が福井へ行くとき聞いたとき、掛谷さんは「福井にはな、うまいカツ丼屋があんねや」と教えてくれた。(おそらく「ヨーロッパ軒」のことだったのである。)大学の研究室にはおびただしい人類学関係の本があったが、そのかなりの部分は掛谷さんが買ったものだったと思う。教官の中には掛谷さんとの思い出を懐かしく語る人もいた。私が京大に移るとき、折悪しく大学改革の時期と重なってしまい、文化人類学のポストは無くなってしまったのだが、もう少し私に力があれば、と悔しく思っている。昨年お会いしたとき、かつて学生とフィールドをやった福井の村を再訪して、とても楽しかったと語っておられたが、それが掛谷さんとの最後の話になってしまった。

福井から京大に移った後、掛谷さんと一緒にやらせてもらうことになった。ゼミでは掛谷さんは目をつむり首を傾けながら、終わり近くまで口を出さずに聞いている。そして一番最後に、肝要なところに辛口のコメントを投げかけ、それでゼミがおわる、というのがスタイルだった。フィールドの人々のインタラクションを論じた私の発表に、「『神は細部に宿り給う』と言うけれども、そういう細かい話ばかりしていてどういう見通しがあるのか」というコメントをもらったことがある。私はその問いかけに答えるため、その後苦心して『神は細部に宿り給うか?』と題する小論を書くことになったのである。そういったコメントを、われわれはひそかに「掛谷さんの総括」と呼んでい

たが、そのスタイルを知らない若い人が「総括」の後に発言したりすると、え… という空気がゼミ室に流れたものだった。

5月に刊行された「アフリカ学事典」にも書かせてもらったが、わが国の「生態人類学」には、“ecological anthropology”に回収されない、独特の含みがある。つまりそれは、われわれのやっていることは、単なる「生態学的人類学」ではない、ということである。伊谷さんは「生きざま」という言葉でそれを語ったが、その方向性を具体的に形にしたのは掛谷さんだった。トングウェの呪医の資格まで取ったという掛谷さんのやり方に、知らず知らずのうちに方向づけられてきたのが、日本の生態人類学者たちではなかったろうか。

われわれの行く先について、まだまだ辛口のコメントをしていただけたらと思っていたのに、掛谷さんは不意にいなくなってしまう。正直、あまり実感が無いのである。またどこかで、あの不揃いな歯を見せてにやりと笑いながら、「おう」と迎えてくれるような気がしてならない。

## 掛谷さんの背中から教わったこと

寺嶋 秀明  
神戸学院大学

私と掛谷さんは5歳離れていた。1973年、私が大学院生として京都大学理学部の自然人類学研究室に入ったときには、掛谷さんはおよそ2年間のアフリカ調査を終えて帰国された直後であった。師の伊谷先生が提唱する生態人類学的研究の先駆者としてタンザニアのトングウェの村に住み込み、期待に違わぬ充実した調査をして帰国されたばかりであった。才気煥発な秀才で、伊谷先生の懐刀であり、理学部の異界のような自然人類の研究室にあってあたかも宵の明星のように輝いていた。それでいていやみなところがまったくなく、みなから愛される人柄であった。

1976年、私は米山さんの科研隊で初めてアフリカに連れて行ってもらった。米山先生、掛谷さん夫妻、赤阪さん夫妻、そしてアフリカは初めてであった梶さんと私、一行7名で日本を発ち、ケニア

経由でザイール（現コンゴ民主共和国）東部のルウィロにあった研究所に向かった。掛谷さんは当時福井大学の教育学部の助教授であった。ルウィロの研究所に到着してしばらくした後、皆でおおよそ1週間、研究所の裏山へサファリをした。初日、初めてアフリカの大地を実感し、現地の人のお邪魔し、現地の食事を食べ、現地のベッドに寝た。しんと冷え込む山の上の一夜は忘れることができない。そのサファリで掛谷さんはまるで水を得た魚のごとく生き生きとされていた。道中、雨上がりの川にとうとうと茶色の濁水が流れていた。掛谷さんはそれを汲んで湧かし、ネスカフェを投入してコーヒーを作った。「こうして飲めば一緒や」とにっこりほほえんだ。ナイロビからほぼ1ヵ月、掛谷さんは米山隊の大番頭であった。

その後、私と掛谷夫妻は他の人たちと別れてタンガニカ湖へと向かった。私はバンボテと呼ばれる狩猟採集民の調査のため、掛谷さんはトングウェの祖先が由来したという伝説の地での調査のためである。掛谷さんは自分の研究はさておき、まず保護者として私のめんどろをみてくれた。カレミエという湖岸の町に着いた翌日の夜、ホテルの食堂で、人類学者のアレン・ロバーツ夫妻に偶然に出会った。彼らはカレミエから約100キロ南下したところにあるンパラというタブワ族の村に居を構えて調査していた。私たちは完全に意気投合し、そこに招待されることになった。ダガー漁の船の灯りを遠目にえんえんとタンガニカ湖を南下し、真夜中すぎ、漆黒の闇に沈むンパラに着いた。アレンさんと掛谷さんは同年齢で学問的興味も近かった。二人は昼も夜もスワヒリ語による会話を楽しんでいた。私はといえばとてもそれについていけず、外へ出ては眼前に広がる雄大なタンガニカ湖を眺めて気晴らしをしていた。そのことを伊谷先生への手紙に書いたら、後日さんざんからかわれるネタになってしまった。

9月の末、掛谷さん夫妻と別れ、本格的に1人で調査することになった。掛谷さんと一緒に歩いたこの数ヵ月で、まずは、アフリカとはどこにもまして愛すべき自然と人間の大地であることを教わった。

2年後の1978年、第2回目の米山隊で、掛谷さん夫妻と再びご一緒できた。2回目は出発から帰国まで8ヵ月、ほとんど一緒に行動した。これがまた弥次喜多道中のように多事多端、山あり谷ありの旅であった。いろいろありすぎていまだに自分でもちゃんと整理できない。失敗もあったし、ラッキーな出会いもあった。イトウリの森の狩猟採集民エフェたちとの出会いは殊の外、素晴らしかった。通称ピグミーと呼ばれているエフェたちは、初めて会ったその日からホスピタリティ100%のおつきあいをしていただき、私たちはただちに彼らの大ファンとなった。彼らと過ごした日々のことを思い出すと今でも気持ちがなごむ。数ヵ月の後、私たちは奇跡のようなすばらしい記憶とともに再来を誓ってイトウリを去った。いつかまた3人でんびりとセンチメンタルジャーニーをしようと、私たちは会うたびに語り合った。しかしその後、ザイール東部は紛争の地となり、現在にまで至っている。私は2回ばかり再訪の機会を得たが、掛谷さんはどうとう夢を果たせず遠い世界へ行ってしまった。

イトウリの旅をめぐる思い出の中でひときわ脳裏に焼き付いているのが、リュックを背負った掛谷さんの後ろ姿である。イトウリの中心にあるマンバサ村まではトラックなどに便乗して行ったが、そこから60キロばかり北のンドゥーイ村までは道の状態が悪く、車はほとんど通行しない。荷物運びと道案内を兼ねた当地の人間を数名雇って、私たちもリュックをかついで片道二日間の徒旅行を何度かした。掛谷さんはワングル出身で、またタンザニアでは歩きの名手伊谷さんの薫陶を受け、歩くことについては信念があった。風景にすっかりとけ込むように、たんと歩みを重ねていく掛谷さんの後ろ姿が今でもはっきりと思い出される。まわりにはレッセ族の村が現れては消え、消えては現れる。森や畑が交互に過ぎていく。なんということのない旅の景色であるが、今考えてみると、そのとき掛谷さんは背中であらゆることを語ってくれていたのである。アフリカという大地のすべて、人類学という営為のすべて、そして人生のすべて。私がおのち、自ら経験したことはみな

そのときに掛谷さんの背中から教わったことだったと思えるのである。

## 掛谷誠さんを偲んで

佐藤 俊

「ドヤ! シュン!」と、掛谷さんは私に逢うと声をかけてくれたものでした。しかし、この独特のあいさつがもう聞けなくなるとおもえば、残念でたまりません。掛谷さんはワングル部では3年先輩で、一緒にワンデリングをすることはなかったですが、里山ワンデリングによって人々の生き様を経験して理解する重要性をつよく説いた人としてワングル部では記憶されています。同期の1人は、掛谷は教祖的な資質をもっている、と語っていました。

人類学の分野では、徹底的なフィールドワークによる比較研究の重要性をつよく訴えていました。その意欲は、伊谷純一郎と鈴木継美の両先生の賛同をえて大塚柳太郎さんと共に40数年前に生態人類学会を創設したことに結実しています。この学会は現在でも世代をこえて盛況をえています。

さらに、その学風は掛谷さんと一緒に学的ワンデリングをした若者たちにも確実に継承されているようです。掛谷さんは、福井大学、筑波大学、弘前大学、そして京都大学において教育研究を担いました。個々の大学では、文化人類学、文化生態学、アフリカ地域研究というように科目名は違っていますが、その根底には生態人類学がひそんでいます。昨年10月中旬に、久しぶりに筑大環境科学研究科の文化生態研究室の卒業生20人余りが名古屋に集まって掛谷さんを囲んで一夜をすごしました。私も同席しましたが、かつての院生はいずれも掛谷さんによるフィールドワークを重視した研究指導を鮮明に記憶していました。また、ある大学では掛谷さんは文化人類学コースの中興の人といわれているそうです。

私にとっては掛谷さんは大恩ある人でした。はじめて掛谷さんにお会いしたのは、学部生のときで、人類学研究室のゼミ室で開かれていた『マン・



ザ・ハンター』の読書会でした。とても弁舌さわやかな人でした。当時は、大学紛争の最中で、授業は不安定で、ほとんど部室か喫茶店にいらびたっていました。夜は飲屋に入り浸るという生活でしたが、その合間によく掛谷さんの銀閣寺の下宿に行きました。

掛谷さんは、離れの一軒家をワングルの部友とシェアしていました。下宿には実にいろんな学生さんが出入りして、酒瓶がころがり、パイプをくゆらせる者がいれば、外で飲んでできあがってころがりこむ者がいたりしました。時には、大学闘争の総括があったり、文芸批評や学問論議がされたりしていました。私が思い出すだけでも吉本隆明、小林秀雄、レヴィ＝ストロース、九鬼周蔵などが論じられていました。

出入りする人はこれまた多様でした。工学部から理学部や文学部に、逆に理学部から文学部に、農学部から教育学部にというような転学部生、ならびに院生、学部留年生、高級外車や鶏卵業の大型トラックで乗りつける者といった具合です。さらには、出入りする仲間の2人が北山を登りにいって、山の中で1人歩きの女学生と出会ってこの下宿に収容するなんてこともありました。

この下宿に行けば、酒にはこまらず、話題にもことかかず、むちゃくちゃながら面白いところでした。このように、この下宿は水滸伝の梁山泊のようですが、仲間うちでは、謙虚にも『鈍儒庵』とよんで夜のサロンになっていました。

やがて、掛谷さんは引っ越してアフリカのトングウェ社会の調査にでかけていきました。仲間たちも就職したり大学院に進学したりして、鈍儒庵の集まりは自然消滅しました。私も、犬山の霊長類研究所の院生になり、京都を離れました。これ以降は、掛谷さんとは、アフリカ学会や生態人類学会でお会いするぐらいになり疎遠となりました。

しかし、掛谷さんとの縁がもどってきました。私が立教大学に勤めているときに、掛谷さんから相談が入ってきました。それは、掛谷さんが弘前大学に異動するので、筑波大学の文化生態学の後任教員の候補者3名のなかに私を推薦したいというものでした。運よく、私はその選考にえらばれ

て、筑波大学に異動しました。私は、『流れる水はくさらず』というワンダラーの心意気を胸に秘めていましたが、思いもかけず、22年間を筑波大学ですごして停年を迎えました。

私は、故郷の京都にかえる決心をした際に、旧友たちとゆっくりと旧交をあたためられることが楽しみでした。とくに、すでに京大を退職していた鈍儒庵の主であった掛谷さんとゆっくりと遊べるのを一つの楽しみにしていました。幸い、掛谷さんは十数年ほど患っている肺の病気がすこし落ちついていました。病気の調子をみながら、3~4ヶ月に1回は、篠原徹さんや家内を交えて掛谷夫妻とグルメをしたり、ときには篠原、掛谷の両人と一緒にグルメ痛飲したりしてきました。我が夫婦の揉め事は、よく掛谷夫妻に助けられていたので、こうした会食の席上では、掛谷さんは、「ドヤ! シュン! 美枝子さんの執事に徹しているか?」と心配してくれたものです。

昨年12月に検査入院をされたときも、我々はたかをくくっていて、そろそろ退院してくるから退院祝いのグルメをどこでしようかと、さがしていました。しかし、とつぜん、流星の落ちるがごとく亡くなってしまっていて、残念でたまりません。

ご冥福を心からお祈りいたします。

## 掛谷誠君を惜しむ

渡邊 毅

梶山女学園大学・名誉教授

掛谷との出会いは、わたしが修士1年、彼が2回生の秋だったと記憶している。教養部の同級生・豊田亘博君は、わたしの無二の親友だが、宇物を卒業後、(株)住友化学に就職した変わり種で、先輩や後輩たちに信頼厚い男だった。その彼から連絡がきた。「ワングルの後輩が進路で悩んでいるので、相談にのってやってくれ。」とのこと。豊田の欠点だと、わたしが勝手に思い込んでいるのだが、いわゆる下戸であり、二人で盃を交わすことができない。豊田が連れてきたワングルの後輩は、結構いける口だった。

豊田を脇に、初対面にもかかわらず掛谷とわた

しは、その夜盛り上がり、熱く話し合ったのだった。掛谷の悩みは、アフリカへの夢を学部時代に実現するか先延ばしにするかだった。探検部が企画進行中だった〈大サハラ〉計画に、勧誘されていたのだ。夢が実現したとしても、その先が展望できない。今やらなければ、二度とチャンスはこないかもしれない。悩みはつきないと話す彼の顔を見ながら、「こいつ歯を見せなければ、米朝に似とる」との印象をもった。

私のアドヴァイスは単純明快だった。アフリカへの夢と将来を、伊谷さんに委ねるのか梅棹さんに託するのかの選択だ。伊谷さんに紹介しよう、それが結論だった。後は、サル研究がいかに面白いのか、伊谷さんの『高崎山のサル』をかなり詳細に解説しながら熱く語りかけたのだった。後年、掛谷から苦言を投げかけられたことがあるが、それは「最近つよしさんの眼は死んだやないけ。嬉々としてサルを語っていたときの眼は輝いとったのに。」との言葉だった。

超多忙だった伊谷さんに掛谷を紹介したのは、年が明けてからだったと記憶している。アフリカからの帰朝後だった。伊谷さんの返答は明解だった。〈大サハラ〉は止めておけ、そして大学院を目指せ、というものだった。掛谷はその助言に従った。工学部から理学部植物学科に転じ、やがて動物学研究科に進学することになった。

当時の伊谷さんは苦悩のどん底にあった。グドールに先を越され、カボゴ基地を閉鎖し、カサカティ・フィラバングの調査も展望が開けていなかった。伊谷さんからは、「厄介なことを持ち込むな。」とのお叱りも受けた。わたしからみると、「伊谷さんは梅棹さんに遠慮し過ぎや。」との感慨もあったのだが……。

その直後に、西田さんからの吉報が届いた。伊谷さんの舞い上がり方は尋常ではなかった。ここでそれを記す余白はないが、落ち着いてからの伊谷さんは、掛谷との邂逅を奇貨ととらえたのではなかろうか？ 掛谷には、サルを研究する気は毛頭なかった。1968年に修士課程に入った掛谷は、トカラ列島の人々を研究テーマに選んだが、伊谷さんはすでに生態人類学を射程に入れていたものと

思われる。

若き学生の相談を受け止め、その将来の責を負い、みごとに学生の夢をかなえた伊谷さんというリーダーは、良い学生に恵まれたともいえる。もちろん、生態人類学の成立には先達としての西田利貞さん、田中二郎さん、原子令三さんたちの貢献は大きいですが、正真正銘直弟子といえるのは掛谷誠であり、掛谷とともに伊谷さんは展望を切り開いたのだ。

生態人類学は発展している。その中枢にいた掛谷は満足すべき一生を送ったといえるのかもしれないが、わたしにはやり残したことがあると思えてならない。その意味で、才能あふれた畏友掛谷誠の早過ぎる死を惜しんでいる。

## 眼鏡がカチン ―掛谷さんの記憶―

菅原 和孝

京都大学大学院人間・環境学研究科

掛谷さんは身体距離の近い方であった。懇親会の席上などで密談めいた雰囲気ですぐ「すがわら、おまえもアホやなあ」みたいなことを言われるとき、必ず二人の眼鏡がカチンと当たった。かつて映画雑誌で今村昌平の作品解説を読んだら、西村晃演じる主人公とインテリ女とがセックスするとき二人の眼鏡がカチカチ音を立てるのが滑稽だと書かれていたのをわたしは必ず思い出し、妙に気恥ずかしかったが、掛谷さんは一向に気になさるご様子なかった。それにしても、掛谷さんから肩に腕を回されひそひそ話を仕掛けられることはつねに胸躍る経験だった。掛谷さんこそ理学部ジンルイ（といってもわたしは学部で伊谷さんのご指導を仰いだきり霊研に進学してしまったが）の希望の星だったからだ。大学院で霊長類学を専攻しながら、いつかはヒトの研究をしたいと念じていたわたしを、二郎さんが東京大学で開催される生態人類学研究会（1973年）に誘ってくださった。そこで初めてトンゲのミニマムエフォットのご発表を拝聴し、心を揺さぶられた。

バリケード封鎖された大学に入学したわたしたちの世代は、信じられないほど生意気で、傲岸不

遜で、観念的であった。人類学をやるからには、呪術や宗教といったおどろおどろしい世界にまで分け入らねばならないと漠然と思っていた。ひたすら動植物を同定し、摂取カロリーを計測し、労働時間を測定する生態人類学の地を這うようなくそリアリズムに苛立ちをおぼえたりもしていた。だからこそ、掛谷さんが呪医に弟子入りし、自らの身体を儀礼の場に差し出したことに大きな衝撃を受けた。犬山を掛谷さんが来訪されたおり、二学年後輩の畏友・丸橋としめしあわせ、憧れの先輩をランチにお誘いした。そのとき「生態人類学の独自性はどこにあるのか」と絡んだ。掛谷さんは涼しげに言い切られた。「ま、下部構造から上部構造に攻めのぼることやね。」長い年月ののちに日本アフリカ学会研究大会で生態人類学を特集するシンポジウムが開かれたとき、この古い記憶に言及すると、掛谷さんが「そんな単純な言い方してへんわ」と切り返されたことに深く驚いた。若い頃の流行語でいえばテッテ的に掛谷さんに食いさがらなかったことを今も悔いている。

そのような「思想闘争」（命がけでそれをせねばと信じこんだ不幸な世代だ）の局面とは別に、掛谷さんの記憶は、暗い青春のなかで冬の日溜まりのようなぬくもりとして残っている。まだ福井に赴任される前、夜遅くに数人の仲間たちと掛谷宅に酔っぱらって押しかけたことがある。そのとき、わたしはあろうことか、英子さんに膝枕をしてしまった。あとで掛谷さんが「ま、膝枕するヤツまでおったんやから、ヨメさんも退屈せえへんかったわな」と評されるのを聞いて、恥じ入りながらも妙に嬉しかった。

掛谷さんの福井時代にとっても楽しい一夜があった。経緯はなかなか複雑だ。犬山の隣町の公団住宅に妻と二人で暮らしていたわたしのもとに、黒ちゃん、寺嶋、山極などが押しかけ深夜まで飲んだあと、山極だけを拙宅に残し、福井で開催された生態人類学研究会に旅立った。閉会后、掛谷さん宅に押しかけ一晩泊めていただいた。当時、寺嶋とわたしは萩尾望都の『トーマの心臓』に熱中していた。わたしは英子さんの宝物である大きなぬいぐるみ（種名は忘却）に抱きついて「トーマ、

トーマ」と叫んで身悶えた。掛谷さんは「おまえ、ヨメさんを山極と二人つきりにしよったんやから、もうあかんで。あきらめなはれ」とにこやかに繰り返された。翌朝、二日酔いのわれわれを感動させたのが、バタートーストに納豆を塗った朝ご飯のおいしさだった。みんなが「もっともっと」とせがむので、英子さんはわざわざ近所まで納豆を買いに走ってくださった。あの一夜は人生の出来事のベストテンに入るほど楽しい時間だった。

3月22日の追悼会のあと赤垣の酒宴の席で、勇気を奮い起こして英子さんのもとへ挨拶に伺った。数回しかお会いしたことのないわたしなど忘れていらっしやるかと思いきや、「ああ、すがわらくんでしょ。エチオピアでヒヒの研究されてた」とおっしゃられたのには仰天し感激した。掛谷さんはきっと「すがわらってのはおかしなヤツでなあ」とか英子さんに話してくださっていたのだろう。そのような掛谷さんの存在に、不安と迷いと観念に取り憑かれていた青春時代のわれわれは、深いところでどんなに励まされたことだろう。共に過ごした時間の総量は微々たるものだったが、この世界という焚き火の光の輪のなかで、掛谷さんとご一緒できたことの幸せに感謝している。その光のなかからいずれみんな出ていくが、とりあえずいま残っているわたしたちは、けっしてあなたのことを忘れない。

## 掛谷さんを偲んで

荒木 美奈子  
お茶の水女子大学

掛谷さんのフィールドのひとつであるザンビアに、青年海外協力隊とフィールド調査を通して4年程滞在していたが、掛谷さんの噂はきけども実際にお会いすることもなく、私には交わることのない別世界の人だと思っていた。その掛谷さんに初めてお会いしたのは1998年のことで、京大ASAFASの助手時代に始まりお茶大に移った後も、主にタンザニアのソコイネ農業大学地域開発センター・プロジェクトやそれに続く科研を通して、掛谷さんには大変お世話になることとなった。

ソコイネ・プロジェクトでは、掛谷さんのもと新たな目標に挑戦していこうという人間が集まっていた。30代が多く、熱い議論をかわしていたが、反面ぶつかりあうこともあった。掛谷さんは、プロジェクトの司令塔として、人間関係の仲介役として、まさに扇の要としての役割を担われていた。タンザニアでの掛谷さんは好奇心旺盛にフィールドを楽しんでおられたが、プロジェクトの構想を練ることに余念がなかった。地域への深い理解というものというのがどういうことなのか、掛谷さんから学んだことは計り知れなかった。

よい思い出も多々あるが、苦しい日々の思い出もある。早い時期から「目に見える成果」を期待されるなか、掛谷さんは、プロジェクト運営に関わる様々なことに気を配られておられた。逆風や荒波をやり過ぎプロジェクトが上向きになり始めた頃に、「これでJICAに対しても成果が提示できますね」というようなことを言ったことがある。掛谷さんはしばらく考えておられ、「名もなき仏師が仏を彫る心境で臨んでいたい」というようなことを語られた。掛谷さんはプロジェクトを実施する上で求められることを理解されておられたが、「成果」にのみとらわれすぎのではなく、フィールドで人びとと向かい合いながら、アフリカならではの発展の道筋をともに模索していくことに際し、仏を彫るような気持ちで臨みたいと思っておられ、その守るべきところをいま一度確認しておきたかったのではないかと思った。この言葉は折につけ思い起こされるのだが、今、掛谷さんの思い出を振り返りながら、掛谷さんの仕事への基本的な姿勢が、無心に仏を彫る仏師の姿に重なってならない。

プロジェクトに続く科研では、プロジェクト時代に撒かれた種が芽を出し、育ち始め、農民の側から内発的な動きが起きてきた。そうした人びとの主体的・内発的な動きが私たちを励まし、力づけてくれた。内部者と外部者が相互に成長していく過程を共有できているような実感があった。フィールドに通いつつ、鶴見和子さんの内発的発展論やそのベースにある柳田国男や南方熊楠などを読みながら、思索を深めていった時期でもあった。マ

テンゴ高地での経験を基に、掛谷さんは、伊谷さんや神田さんとボジをフィールドとして、開発実践と研究を繋げる新たな試みに取り組みされた。そして、長い年月に渡る「ひと仕事」の総まとめとして、掛谷さんと、掛谷さんを誰よりも支えてこられた伊谷樹一さんとの編著で『アフリカ地域研究と農村開発』の刊行に漕ぎつけたことは、なにより嬉しいことであった。

掛谷さんが退職された後も、数名のメンバーで年に1~2回タンザニア研究会を開催していた。2013年は春から夏にかけて掛谷さんの体調があまりよくないとのことであったが、11月下旬に南方熊楠ゆかりの南紀白浜で行った研究会には元気な姿をみせられた。研究会では、ひとりひとりの報告に耳を傾けられ、掛谷さんならではのコメントをくださった。掛谷さんは、雲がかかったような状態でも、その雲を吹き払い背後に隠れている世界を見せてくれる芸当をお持ちだが、その時も私たちの抱えていたもやもやを吹き払ってくださった。夜の宴会でもお元気で、久々の掛谷節に楽しいひと時を過ごした。翌日、南方熊楠記念館を訪れ、館内をゆっくりと回ったが、掛谷さんもひとつひとつじっくりと見ておられた。その後地元の市場に行き、私は東京に飛行機で戻るため、白浜駅に向かう掛谷さんらとそこで別れることになった。別れ際、「お元気で！また会いましょう」と握手をし、掛谷さんらが乗ったタクシーが晩秋の陽ざしのなかに見えなくなるまで名残惜しく見送った。

それから一月後に掛谷さんの訃報に接することになった。あまりにも突然のことで、白浜でのお元気な姿を思うと信じるができなかった。冬から春にかけての日々を呆然と過ごし、追悼の集まりなど機会があるごとに気持ちを切り替えようと思ったのだが、なかなか気持ちの整理がつかずに今に至ってしまった。追悼文を書くにあたり、掛谷さんのご著書を読みなおしたり、数々のことを思い起こしていくなかで、今度こそ一歩踏み出そうと思っている。それぞれに掛谷さんから受け継いでいくことがあり、受け取った襷をたずさえて歩いていくことになるが、掛谷さんのことなの

で、「まだまだやな」、「あほっ」、「いいんやないの」などと耳元でささやいてくれるような気がする。

掛谷さんとの別れは悲しく寂しいことであるが、出会えたことをとてもありがたく思っている。掛谷さんへの感謝の気持ちとともに、ご冥福を心からお祈りしたい。

## 信じなかった師の言葉

岡 恵介  
東北文化学園大学

掛谷さんがこの世におられなくなって、4か月が過ぎたことになりました。

この文章を書くためにPCを開いても、指が動かずあきらめることを繰り返してきました。京都での「追悼の集い」に参加し、筑波時代の友人たちとも久々に邂逅しました。巡礼スタイルで参加した人や、頭髪を減量した変装スタイルで現れた方々、かく言う私も腰痛を再発してコルセットを巻いての参加で、時の流れを体感しつつ、飲み会で痛飲し区切りをつけるつもりでした。が、だんだん自分の中で違和感が広がり、途中で退席してしまいました。

この喪失感は、何だろう。ではまめに連絡を取っていたかといえば、まったくそうではなく、ずっと賀状のやり取りだけという不肖の弟子でした。

私は筑波で修士課程2年と、その後の研究生2年の計4年間指導を受けました。研究生は2年間までという規定があり、その後をどうするかが悩みでした。筑波や他大学の博士課程に行くか、高校の非常勤でも続けながら研究室に出入りして研究を続けるのか、いくつかの選択肢がありました。私は自分のフィールドだった北上山地の山村・安家に行って、中学校の臨時の先生をしながら研究を続けることにし、掛谷さんにそう申し出ました。1985年の冬、2月のことでした。

掛谷さんからは、

「これから東北は注目を浴びることになるだろうから、先駆けてムラに身を沈め、地道な研究をしていくことはいい選択かも知れん。」

と激励いただき、重ねて

「何かあったら、いつでも助けに行ったら！」と、浅田真央のコーチのようなことをおっしゃられました。

私は、またまたおっさん、そんな安請け合いして…と、正直そう思いました。

当時、安家へは、筑波から常磐線の夜行で盛岡へ至り、朝早く山田線に乗り、茂市駅で数時間待って乗り換え、今は廃線となった岩泉線で岩泉駅に到達する頃にはその日も夕暮れが迫り、安家に行く車を探して便乗させてもらう、という旅程。国内とはいえ、おいそれと助けに来られるような地ではありませんでした。

しかし結局その後の約20年間、私は安家に居続けることになりました。信じなかった掛谷さんの言葉が、どこかで安家でのフィールドワーク、というよりも暮らし、中学の臨時講師から町の教育委員会の社会教育指導員、久慈の短大への就職、結婚、家の新築、子育てという、その後すべての安家でのライフイベントを支えてくれていました。

こう書いていても掛谷さんの「お前の文章はラブレターや」、「センテンスが長すぎる！」という叱咤が蘇ってきます。

安家の研究を本にまとめた時、出版社の要請でしかるべき先生の序文をつけるべし、ということになり、永らくご無沙汰の電話でどうかと、恐る恐る掛谷さんをお願いしてみました。掛谷さんは、あれこれ他の先生の名前を挙げたのち、それが無理とわかると非常に渋々と、約束はできないがとりあえず考えてみる、と答えられました。

しかしその後はとんとん拍子で、体調も悪かったらしいのに、旧知だった編集者に挨拶の電話まで入れてくれ、遅筆で知られる師匠がお願いした期限のわずか2日後に序文を送信してくれました。「岡のしょぼしょぼ頼む作戦にやられた」と言っておられたと、後で聞きました。掛谷さんの序文入りの著書がある。

今となってはこれが、不肖の弟子のひそやかな誇りです。

## 都会人掛谷さんのアフリカ調査

梶 茂樹

### 京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科

私は理学部ではなく文学部の学生であったが、掛谷さんには、よくしてもらった。1972年、掛谷さんがタンザニアでの長期フィールドワークを終えて帰ってこられたあと、私は時々スワヒリ語のことを聞きに行った。当時、私は自然人類学の人たちはほとんど知らなかった。研究室では、変なヤツが来たと言っている人に、掛谷さんは、「コイツは言語の学生だから」とかばってくれた。私の主たる興味はアフリカの部族語にあったが、部族語のデータは日本にはなく、スワヒリ語しか相手にできなかったのだ。

掛谷さんのスワヒリ語は素晴らしい。淀みなく、滔々と喋る。あんなに上手い人も珍しいのではないか。一度そのことを掛谷さんに言ったら、「いや、西田（利貞）さんの方が上手いのではないか」ということであった。ただ、あまりスワヒリ語が上手だと、全てスワヒリ語で用事が済んでしまうので、現地語を話す必要がなくなってしまう。難点と言えば難点である。それはともかく、私は掛谷さんにスワヒリ語の教材や勉強の仕方やちょっとした言い回しなどをしばしば聞いていた。

掛谷さんと一緒にフィールドに行ったのは1976年、米山俊直先生の科研費の隊に入れてもらってザイールに行った時であった。当時、私は大学院の博士課程の学生であったが、掛谷さんはすでに福井大学の助教授であった。掛谷さんは米山先生の弟子ではあったが、もともとのアイデンティティは伊谷純一郎先生である。ザイールでのサファリも伊谷風であった。そして、タンザニアのトンゲエの地で、伊谷先生がどのようにサファリをやるかを面白く可笑しく再現してくれた。「伊谷さんが、これはな、〇〇と言うんやと言ったら、武田がスーッと寄って行ってシャシャシャとノートに書くんや。そして、伊谷さんがまた、これはなと言うと、武田がスーッと寄って行ってシャシャシャとノートに書くんや。」と笑いながら話してくれるのである。そのザイールでのサファリの時、休憩時、掛谷さんがアイスコーヒーを入れてくれた。

疲れた体にはおいしく一息ついたが、後でその水は土色に濁った川の水であったと白状した時は驚いた。「コーヒーにしたら同じや」と言うのであるが、ちょっと荒っぽい。

しかし、私が掛谷さんを見るところ、その特徴は掛谷さんが都会人であるところにあると思う。掛谷さんは天王寺から阪和線で南東に1駅行ったところにある美章園の出身である。私ごとになるが、私の家内は天王寺から環状線で北東に1駅行ったところにある寺田町の出身である。JRの路線は違うが、どちらも東に向いて行くので、美章園と寺田町は距離にして恐らく1キロぐらいしか離れていない。私は香川県の田舎の出身であり、都会人の家内とは多くの流儀が違った。それでしばしば衝突することがあった。しかし家内と掛谷さんはよく話が合うのである。それは地理的的近さによるよりも、私には、都会人としての共通性によるものと思える。

都会人は田舎の人間とは違う。それはお酒の飲み方でも、お茶漬けの食べ方でもそうである。私のような田舎の人間は、例えばハサミを使うと、元あった所に返さないと気が済まないが、都会人は、その辺は無頓着である。また使えればいいじゃないかと気楽に考える。掛谷さんがタンザニアでビールをガブガブ飲んでいるところしか知らない人には、このあたりの都会人としての美意識は理解できないかもしれない。しかし、もし日本で落ち着いて一緒にご飯を食べ、一緒に日本酒を飲んだらすぐ理解できることである。

掛谷さんが調査したアフリカの地は、タンザニアのトンゲエもマテンゴも、ザイールのバレーセも、またザンビアのベンバもみな田舎の地である。私のように小さい時から田圃をやっていた人間はアフリカで農業器具を見ても、「ああ、これは〇〇だ」とすぐ体で理解するが、都会人は恐らく、1から頭で理解しないとイケない。しかし、これが逆に大いに知的刺激を与えたのではないか。こういった観点から、もう一度掛谷さんの書いたものを読んでみたいと思っている。

## ムゼーはあの山の上に

中山 節子  
金沢大学

「セスコ、お前の先生もドコタラなのか？」  
私がマラウイ湖岸に長く住み込んだのは、マラウイ共和国二代目大統領の任期中である。医師だった初代につづき、二代目もドコタラ (Dr.) の称号を用いることを好んだが、それが通ってもいない国外の大学で次々と名誉博士号を得るものだから、ドコタラとはいったい何のことかと村でもしばしば話題になっていた。

「ムゼー・カケヤは私の大学のれっきとしたプロフェッサラだけど、シニャンガ (伝統医) としてもドコタラなのよ。木の薬も獣の薬も知ってるよ。タンガニーカで勉強して、今はあの山の向こうに通っておられるけど」

湖の西岸に住む人たちにとり、対岸のタンザニアの山むこうといえば、最強の呪薬を処方するシニャンガたちがすむ場所だ。そんな「薬」の本場に、ムゼー・カケヤはカトー (湖辺トンガ語で「取って来い」の意) という弟子を遣り、マテンゴの薬を集める修業を課している (wakato mankhwala waku Matengo) そうではないか。これはどうやらほんもののドコタラらしい—

「それでセスコ、お前も薬を集めに来たのか」

「いやいや、私はムゼーからドコタラ・カダに預けられてこちらに来て、魚をとる人たちの勉強をしているの」

こうして、掛谷さんは渡られなかった湖のこちら側まで名をとどろかせ、私は伝統医見習いや製薬会社の手先と疑われることなく調査を行うことができた。「セスコの先生はたいへんに権威ある厳格な方だから、俺たちがセスコに色々教えてやってもなかなかうんと言わない。セスコがいつまでも卒業せず、したがって結婚もせず、またドコタラの仲間入りをしないのも仕方がないことだ」というのが村人たちの間での理解になった。

もちろん上記の半分はつくり話だ。先輩の加藤さんは呪薬の蒐集をしておられたのではないし、温厚な指導者である掛谷さんのもとで博論を提出しなかったのはひとえに私の努力不足の所為であ

る。しかし掛谷さんほど、ローカルな知と学知を結びつつ行われる我々の稼業と権威の在処について、説明を容易にしてくださった方もなかなかおられまい。

掛谷さんがあの山の上へ昇られ、論文ではなく追悼文を寄せることになり、筆がますます重い。アフリカでは湖の向こう側におられた掛谷さんは、京都では書けない時期をじっと見守って下さった偉大なメンターであり、人生で一番情けないときに、そうあることをお許し下さった恩人だ。そして何より、その情けなさを「勲章」に換えてこそ、「悪を飼い慣らしながら生きる」人びとの経験の深みをとらえることができると諭して下さった大先輩だ。掛谷さんの「勲章」に救われたひとりとして、せめてご存命中に磨いてお見せできなかったのが心残りである。

## 掛谷さんが残した言葉、「人間の生きざまを見るんや」

黒田 末寿

私が自然人類の大学院生になった1973年の春、まだゼミが始まっていなかったように思う日のこと、掛谷さん宅に寺島秀明さんとお邪魔したことがある。今も残っている一乗寺の「福山マンション」の、たしか2階だった。一乗寺界限は、その頃とはすっかり装いを変えてしまったが、「福山マンション」の看板がついた小さな入り口は全く変わらず、ときどきその前を通るとき、ふっとその時の掛谷さんの言葉を思い出す。

「俺が人類学で何をしたいか？人間の生きざまや、人間の生きざまを〈見る〉、それだけや。」

〈見る〉のところは、じつはよく覚えていず、〈見たい〉だったかも知れない。が、知りたいとか、描きたいとか、書きたいではなかったと思う。というのも、掛谷さんの言葉がつかるところ、「人間の現状をそのまま受け入れる」という意味だったのにひどく驚いた記憶があるからだ。「生きざま」のざらついた語感、人間の現実に向き合うニュアンスにもひっかかった。もとは現実主義といわれる大阪人の言葉かも知れないが、掛谷さんが「生

きざま」と言うと、人間に向き合う「覚悟」と「誠意」のようなニュアンスが漂うのだった。

私は、京大理学部を出ていったん就職した先の経験で、大げさだが「人生観」が変わり、どう生きるか思い悩んでいるうちに伊谷先生を思い出して、「そうだ、アフリカだ」と決め、とりあえず自然人類学研究室の修士になった。アフリカに惹かれたのは、伊谷先生の仕事からだだったが、私自身はこれまで経験したことのない世界を経験したらなにか分かるのではないかていどのことでしかなく、深い意味はなかった。一方でその頃は、まだ、ナイーブにも、学問の目的は、法則や新しいことの発見によって人類の知的財産や福祉向上に貢献することだと考えていた。だから、「人間の生きざまを見る」は、「本当にそんなことで良いのか?」、「それならなぜ、アフリカに行かないといけないのか?」とか、二重三重に疑問がわくことだった。だけれど、掛谷さんが言う「生きざま」の言葉はそうしたことを越えていることも何となく感じ、ほとんど問い返すことなくお宅を辞したのだった。

掛谷さんとゼミを共有した時間は短い、トングエの病気観やもてなし文化の話は新鮮ですごくおもしろかった。一方、私たち後輩のゼミ発表に対しては、ほとんど発表内容に関する質問をせず、最後に、「それでお前は何を言いたいんや?」と問うのが常のパターンだった。それは、発表の趣旨と先行研究との関連を分かりやすく要約せよという意味ではなく、その研究が本人の生き方（生きざま）や人間観とどう関わるのかはっきりさせているのか問うていたのだ、と今なら思うが、当時は分かっていなかったから、私は、たぶん期待はずれのことばかりを答えたに違いないと思う。掛谷さんは、それに対し、ただ、「ほうーかー?」と言うだけだった。

掛谷さんの名前を最初に聞いたのは、伊谷先生からだ。先生に初めて会ったのは1970年の大学闘争のさだなかのことで、次のようなことを言われた。

「大学院生に最近の研究が初心を忘れて小さくなっていると突き上げられてな、私も反省する良

い機会になった。今調査を中断しているが、それはよかったと思っている。アフリカでの調査の総点検をして新規まき直しするところだ。」

そのあと、掛谷さんが、物の側や実際の行為から社会を見ると社会文化人類学が言ってきたこととかけ離れた実態が見えてくる研究を紹介したことや、森明雄さんの「ニホンザルは集団内で〈出会わない〉」という調査結果、さらに加納隆至さんのカサカティのチンパンジー調査などを話して下さった。そして最後に、掛谷さんたちと生態人類学の構想を練っていることと、ピグミーチンパンジー（ボノボ）の調査計画も話された。そのとき、先生の話があまりに魅力的だったので、調査中断の責任の一端を担いだ身なのに、思わず「できたらピグミーチンパンジーの調査に行きたいです」と言ってしまったのだった。

その続きで、掛谷さんは私の人生で決定的な役割をしている。1973年の1月に加納さんがピグミーチンパンジー調査隊員を1名欲しいと伊谷さんに頼んだとき、私が指名されたのだが、少し年を食っていたとはいえM2になったばかりでアフリカに派遣することはその当時では異例だった。ゼミのなかで行われたその人選の後、「半年後にアフリカに行く」と紅潮していた私に、掛谷さんが言った。「伊谷さんにな、黒田を行かせなはれと強く推薦しておいた。」

1973年からのピグミーチンパンジー調査に行けていなかったら、霊長類学をやっていたとしても、様々なチャンスのズレから私の人生はかなり変わっていただろう。

掛谷さんが亡くなられたと聞いて、虚脱感とともに思い出したのが、このことと「生きざま」の言葉だった。掛谷さんは、生態人類学を「生きざまの人類学」と考えていただろうと思う。それだけでなく、自分の生きざまを誠実に生きた人と思う。そのことを一度ゆっくり話したかったが、自分の生きざまがいい加減で聞きにくく、「アフリカ的開発」についての話が最後になってしまった。

ご冥福を祈ってやまない。



## 筑波時代の掛谷先生

南 真木人  
国立民族学博物館

私が掛谷さんの教えを受けたのは、筑波大の修士課程環境科学研究科に入学した1984年であった。とはいえ、私は翌春から青年海外協力隊でネパールへ行くことになり、帰国した1987年には掛谷さんは弘前大に移られて筑波にいなかった。掛谷さんに発破をかけられ調査に出かけ、後任の佐藤俊さんに拾われて修士論文作成の指導を仰いだのである。

弘前大を卒業後、入院のため1か月遅れで筑波入りした私は、掛谷さんからまず「掛谷ガールズ」あるいは「アマゾネス軍団」と呼ばれていた先輩たちに受け容れられることが、このゼミに入れる条件であると告げられた。当時の文生ゼミには、杉山裕子さん、東宏乃さん、板垣明美さん、山口景子さんなど錚々たる人物が在籍しており、ゼミに加わる新入生を値踏みしていたのだ。深夜に及ぶゼミにはゼミ生以外にも学類（学部）の学生や博士課程歴史・人類学研究科、医専（医学部）の院生などが集い、学問の迫力を伝える場となっていた。掛谷さんはきまって最後に発言し、断片的な話題や錯綜した議論を総括した。川喜田二郎先生のことを「造語の名人」と呼んでいた掛谷さんだが、ご自身が「最小生計努力」はもとより「一周遅れの最先端」、「0次産業（国土保全産業）」、「相互助長的」など、熟慮を重ねて編み出したであろう造語をそれを感じさせずにさりりと口にされる造語の達人だった。

飲んだときにはよく「わしらは兄弟姉妹や。インセスト・タブーを侵してはあかんのや。純潔教育や」といい、ゼミ内の恋愛はご法度だった。なぜだったのかはついに聞きそびれたが、ゼミ旅行といえば混浴温泉という豪胆な時代にあって、慎みが大事だと教えてくれたのだろうか。もっとも、そのため潜行しておつきあいしているカップルが少なくなかったように思う。

ネパール出発前、私はゼミで拙い調査計画を発表した。掛谷さんはそこにネパール研究の先達であり、京大つながりの水野正巳先生（農業総合研

究所、現日大生物資源科学部）を招いてくれた。しかも、そのことは当日まで知らされることなく、私はとても驚き、その暖かい配慮と激励に感動した。協力隊（村落開発普及員）の予定任地がチェパンという狩猟採集をしている人びとの地域ということで、私はそれを想定した構想を話した。それに対して掛谷さんは「純粋な狩猟採集民と思いきも実態が見えなくなる。決めつけるな、純粋より不純が面白いのだ」と諭し、トータルなエスノヒストリーを考える時だと力説された。調査の過程についても「3か月目で全体に突如として見えてくる時がある。だがしばらくすると、そのスケッチアップしたものが音をたてて崩れ、1年半ほどすると、再び亡霊のようによみがえってくる。その時、基本的にとらまえたと考えてよいだろう」と教示してくれた。さらに私の性格を見抜いてか「必死で言葉を覚えろ。ぐうたらぐうたらしている間に、一つでも言葉を覚えろ」と檄を飛ばした。もっとも掛谷さんの文化生態学の講義では、**original affluent society**の文脈で「ぐうたらこそ人類の本流だ。滔々たる人類史の流れはぐうたらだ」と説かれていたのであるが。

一方、そんな私に掛谷さんは、1983年に筑波大を退官されていた文生ゼミの創始者、川喜田先生を紹介しようとはせず、訪ねてみなさいともいうことはなかった。だいぶ後になってそれは「（プロジェクトの助手要員にされ）つぶされてしまう」と思ったからだと言った。掛谷さんからうかがった。学生の個性を見抜いて親身に考えてくださり、黙って手を差し伸べてくれる稀有な先生であった。またその出し方とタイミングが、水野先生の例からも見てとれるように絶妙だった。

マルチな才能と、学問と人への愛情にあふれる掛谷さんにも、一つだけ苦手とするものがあつた。それは野球だ。私たちは大学図書館裏の原っぱでときどき草野球をしたものだが、ある日、最初で最後だったと記憶するが掛谷さんも参加した。ところがそれが、いわゆる「女の子投げ」だったのである。さっそく東さんが、掛谷さんの「雅投げ」と呼びはじめ、文生の伝説になった。

2013年10月、村田元夫さんのお膳立てで「掛

谷さんと俊さんを囲んで文化生態の有志で集まる会」が名古屋でもたれ15人が集った。そこで掛谷さんは「42歳という体力も気力もあった時代にでおうた諸君やったな」と筑波時代を振り返り「院生からフィールドの話が聞けて僕も得した」と語られた。そうした充実した時期に掛谷さんと出会い、薫陶を受けることができた喜びと恩恵を私たちは今かみしめている。掛谷さん、どうもありがとうございました。

### 「君の40代をくれ」－掛谷さんとの怪しい夜 根本 利通 ダルエスサラーム在住

手許に古い写真がある。場所はもうなくなってしまったダルエスサラーム郊外のイタリア料理のタベルナ、日付は1996年7月27日になっている。写真のなかでは掛谷誠さんを中心に、栗田和明さん、鶴田格さん、辻村英之さん、角田学さん、そして私の家族が皆笑顔を浮かべている。この夜、衝撃的な事件があり、掛谷さんというتماずこの晩のことを思い出す。

掛谷さんと最初にお会いしたのは1992年か3年だったと思う。トングウェの呪医として高名だった掛谷さんのことはマハレで耳にしていたが、1980年代はもっぱらザンビアのベンバの調査をされていて、タンザニアには見えていなかったはずだ。1992年から、JICAの短期専門家としてたびたびタンザニアに来られた掛谷さんは、農村調査と開発とを結びつける新たな方法を模索されていたのだ。

その晩、研究者仲間の懇親というか歓談の宴だったが、掛谷さんは一仕事終えた充足感・高揚感があったのだろう。非常に上機嫌で饒舌だった。特に角田JICA専門家(当時)とよく話していた。宴たけなわのころ、掛谷さんは角田さんの手をしっかり握って、「根本さん、あんなあ、今日は角田さんに君の40代をくれと頼んだんや」と私にささやきかけた。角田さんはごっつい筋肉質の男性なので、一瞬怪しいことを想像してドキッとしてしまった。「なんやねん、この大阪のおっさんは…」

と。これは私だけでなく、宴席にいた人たちにも強烈な印象を残したのではなかったか。当時40代の前半であった角田さんを、長期間のプロジェクトのリーダーとして口説き落とした勝利宣言だったのだ。

これが1999年からフォーローアップまで含めると7年間行なわれたJICAとSUA(ソコイネ農業大学)とのプロジェクト方式技術協力であるSCSRDの開始のゴングであった。

その後SUAメソッドという開発実践のアプローチを生み出した掛谷チームの活躍はよく知られる。研究よりも実際の農村の人たちの暮らしに興味がある私は、関心高い傍観者として、多くの大学院生が往来し、掛谷さんの叱咤を受け、フィールドに密着した研究者となっていくのを見てきた。今や彼らは通称団子30代として活躍している。そして、あの晩の結果が、角田さんの娘さんにも及んでいるのだろうという昨今である。

私個人の記憶をもう一つ。2011年に拙著を出し、掛谷さんにも贈呈した。たくさんの方がたからコメントをいただいたが、掛谷さんからのそれが一番嬉しかった。あとがきに書いた私のアフリカとの関わり方の入り口の話、掛谷さんは「なんだか深く了解できたような気になっています」とコメントしてくれた。私は喜んだのだが、ふと、いやいや掛谷さんは誉め上げて木に登らせることで、若い人たちを育てきたんじゃないかなと立ち止まった。その向こうに目を細めてにやっと笑っている掛谷さんの顔が浮かんだのである。

掛谷さんが京大を退官され、無官の太夫になられたことを聞き、次は夫人と一緒に調査を離れたタンザニア漫遊旅行かな、その時はお供したいと思っていたが、叶わぬことになった。

合掌。

(2014年5月10日)

## 「鳥の目」・「虫の目」－掛谷誠先生の追悼にあたって

東 宏乃

フェリス女学院大学非常勤講師

掛谷先生は、風のような人だった。その最期も、きっと颯爽としたものだったに違いない。しかし、3. 11以後の日本の混迷を見るに、掛谷先生を今こそ聞きたいと思う。でも、掛谷先生の生の声にはもう接することができずと知ると、その悲しさは言いようがなく、悔しささえ覚える。

私は、筑波大学大学院環境科学研究科「文化生態ゼミ」修士1年生の時から、直接教養を受けた。掛谷先生は、アフリカ研究の第一人者であることはご存知のとおりだが、同時に、文明論を鋭く展開する思想家でもあった。生態人類学のフィールド研究を第一義としながらも、常に世界にアンテナを張り、学際的に文献を読破し、ゼミ生との議論を好んで仕掛けてくださった。つくば学園都市の宿舎にゼミ生がおじゃますると、居間には、『世界』や『政治をするサル』に加え、「丸山眞男」や「吉本隆明」「柄谷行人」、そして、「鶴見和子」や「山尾三省」まで、実に多くの書物が堆積されており、奥様の英子さんも交え、議論のテーマは尽きなかった。ニューアカデミズムとパラダイムシフトが席捲していた時代だった。

私は、修士1年生の最初「文化生態学原論」で、「鳥の目」、「虫の目」という視点を掛谷先生から教わった。「鳥の目」は、文字どおり鳥のように空から対象世界を俯瞰して巨視的にとらまえる視点であり、一方、「虫の目」は、地面に這いつくばって具体的な対象について愚直なまでに微視的にとらえる視点である。そして、ものごとを見るには両方の視点が必要で、その往復運動が新たな分析や発見に役立つという教えであった。

そして毎週火曜日、午後から夜にかけて6～7時間続くゼミでは、フィールドワークから戻ったばかりの修士2年生の現場報告を軸に、「虫の目」から見たフィールドについて活発な議論が交された。当時まだフィールドに本格的に出ていなかった1年生の私は、「坂本さんちのマサシさんが…」とか、「岩海苔採りのおばさんが…」とか、ゼ

ミの先輩方が描く固有名詞の生活世界に圧倒されたものだ。そして、川喜田二郎先生の空高くから発せられる絶妙な見解や、意外な角度から質問される西田正規先生の問いに加え、柳田国男や宮本常一をも彷彿とさせる、人間愛あふれる掛谷先生のコメントに、皆、よく聞き入ったものだった。そして、掛谷先生はいつも、ゼミ生がフィールドの実態にどこまで迫れているのかを鋭く看破し、「仮説はフィールドで崩れ、同時に、新たな仮説はフィールドでこそ生まれる」、というのが口癖でもあった。

他方、掛谷先生はとてもスマートな面を見せた。「鳥の目」である。

ある1つのエピソードを記しておこう。人類学の学徒からみて、「国家」とは何か？という問いが掛谷先生からゼミ生に投げられたのである。国家とは、制度の主体であるとも、法律を担保する単位であるとも、答える者があったが、掛谷先生の解答は次のようであった。タンザニアのトングウェ族の村人に聞いたら、「国家とは紙を配る人」だった、のだそうだ。何かの通達か選挙広報の類なのであろう、行政官が村に来て書類を配る。その様子を、非識字者の村人が見て、彼らは「紙を配る」のが国家だと思うしかなかったのだ。この村人達のいわば誤解を、私はある種の哀しさとともに「なるほど」と納得したことを覚えている。トングウェ族の村人のこの理解は、教育学者・勝田守一の言う「文字は官僚の書記言語として必要だった(=庶民には「書き言葉」は必要ではなかった)」という指摘とも一致する。このように、無文字社会に生きる村人や、為政者の歴史から見れば名も無き存在として捨て置かれる人々に光を当てる、掛谷先生の優しいまなざしと強い正義感、人としての高い品性と学者としての深い洞察力に裏打ちされていたとあってよい。

そして、アフリカは独立したが、1980年代当時、アフリカ諸国の多くが、援助に頼り汚職にまみれ、地域自立を果たせないままにあることは、掛谷先生の中に忸怩たる思いを抱かせていたのだと思う。それを踏まえた上で、「鳥の目」で、国家と国民との〈隔たり〉に想いを馳せ、アフリカ

世界における＜内的フロンティア＞＝アフリカ型の農耕社会について、独自の発展論を待ち得ないものかと、掛谷先生は苦闘しておられたのだ、と私は受け取っていた。

そして、2013年10月14日、名古屋において、「文化生態ゼミ」同窓生有志で、掛谷誠先生と佐藤俊先生を囲む会を持った。その時、掛谷先生は本当にお元気で、ゼミの議論が再来したかのようなキレをお見せになった。そして二次会で、私は、ウン十年前に書いた修士論文を世に出すべきだと、掛谷先生から叱咤された。あれほどのデータがあり、対象世界とラポールがとれているのに、未だにフィールドに恩返しをしていない、と激励してくださったのだ。これは、この夏、田辺のおばちゃんに会いに津軽に行き、彼女が生きた巫者としての一生を、「野のカウンセラーを生きる」と題して一冊の本にまとめねばなるまい、と心した。

掛谷先生は、本当に残念なことに早く逝ってしまわれたが、ありがたいことに、掛谷先生の教えによって私は生かされている。「我々は、幼稚園か大学院の教師にしかねれない。」とは、伊谷純一郎先生から掛谷先生に伝えられた教育観の一端のようだが、学校教育が担う知識偏重型の教育ではなく、徹底してフィールド（＝現場）から学び議論するというラディカルさを（不肖の弟子であることが許されるのであれば）私も引き継げればと思う次第である。

掛谷先生、どうかトングウェ族の呪医の知恵と力で私を見守り、そして風となってこれからも私を訪ねてください。

末筆ながら、ここに掛谷先生のご冥福を謹んでお祈りする次第である。

解きほぐす人・道づくりの人・問いかける人：  
掛谷誠先生を悼む

杉山 祐子  
弘前大学人文学部

いまでも忘れられないのは、紫煙たちこめる深夜のゼミで、「これの何がおもしろいんや？」と問いかける掛谷さんのまなざしである。当時、掛谷

さんは30代半ばの若手助教授、私は筑波大学歴史人類学研究科で掛谷さんのご指導をうけ、掛谷さんが兼任する環境科学研究科の文化生態学研究室に入り浸っていた。

私たち学生が作るレジュメには、フィールドでの2～3ヶ月を地元の人たちと働いて得た情報がむやみに詰めこまれている。掛谷さんはじっくり話を聞き「これの何がおもしろいんや？」と問う。川喜田二郎さんや西田正規さんという贅沢な教授陣が、思いもよらぬコメントをくりだす。掛谷さんが加わって議論はさらに広がり、なるほど「おもしろい」とはこういうことか、と興奮したものだ。掛谷さんは、私たちがフィールドで身体にしみこませてきたものを解きほぐすかのように、丁寧にデータを読み解く方法を見せてくださった。

掛谷さんご自身は、いったい何を考えておられたのだろうか。学生のフィールドやテーマは異なっていたが、掛谷さんが常に気にかけていたのは「葛藤回避のメカニズム」である。資源をめぐる競争が楽しみに転じ、対立ではなく強い親和性を生み出すことや、平等を期すはずの分配がかえって不満を生じさせることなど、相反する情動が巧まずして織りなす社会のしくみについて、しばしば語っておられた。人間にとって不可避の情動や葛藤が、共にくらすしくみへと編みあげられるさまや、それがあつた種の制度として姿をあらわす過程に、社会性のありかを透視しようとされたのだと思う。

掛谷さんは、個別具体の細部を見ながら、同時に人類の長い進化史を映しだす鏡をもっておられた。世界はどうあるべきかを常に問いかけてこられたそのまなざしは、これからさらに輝きを増すはずだった。俯瞰的な視野をもつ余裕をなくしたこの社会で、いま、私たちがもっとも必要としている未来への物語を示せるはずだったのに。

掛谷さんは、何も無いところに新しい道を拓いてきた、道づくりの人でもある。生態人類学を創始されたのはもちろん、筑波では、科研費で院生を海外に連れて行く道を拓いた。「前例がない」と岩のように動かぬ大学本部に、大量の書類を作っては何度も交渉に行ってくださった。その熱意が道を開き、私はアフリカ研究に導かれた。その後

もどれほど多くの院生が海外調査の機会を与えられたことだろう。

アフリカでの調査を開始するときにも、山ほどご心配をおかけしたと思う。ザンビア調査では、掛谷さんと奥様の英子さんが日々の豊かなくらしかたを見せてくださった。女の人類学をやれ、とジェンダー研究の道も示してくださった。「女を育てなあかん」と口癖のように言って、まだ数少なかった女子学生が普通に研究できる環境も作られた。思わぬハラスメントにあって弱気になったり、自信をなくしたりしたとき、掛谷さんが発する「ひるむな、戦え!」「よし、いける!」という言葉に力づけられ、研究に立ちもどった学生は私だけではあるまい。「アマゾネス」とまで呼ばれる女子学生の一団が文化生態学研究室に出現したのも偶然ではない。

でも掛谷さんの姿がいちばん輝くのは、ミオンボ林の風景のなかである。アフリカを愛し、村びとからも深く愛された掛谷さん。とくに少年たちの信頼は絶大だった。ベンバの村での掛谷さんは、少年たちの道案内でミオンボ林を歩きまわった。木々の名前をつぎつぎ聞いてはノートに書き記すのだが、ときおり少年たちが「この木は何でしょう?」と逆襲をしかける。みごと正解だと鼻高々、まちがうと悔しがる掛谷さんにいつも大きな歓声がわいた。

途中の休憩も得がたい時間だった。ミオンボ林のなかでゼミが始まるのだ。木陰に腰をおろすと、掛谷さんはおもむろに小さな羊糞をとりだし、アーミーナイフで切り分け「内緒やで」と、にかつと笑う。羊糞を食べながら、ベンバの農法や村の生活、将来の夢などについて少年たちの考えを尋ねたものだ。少年たちも掛谷さんの調査目的などを質問してくるのだが、掛谷さんは一つ一つに答え、ベンバの自然に対する知識や技術がどれほど奥深いかを、熱心に説明するのだった。ベンバが歩むべき道についての議論も白熱した。羊糞がなくても、そこは知的な実りのある充実した場だった。掛谷さんはここでも、生きるべき道を次の世代に問いかけつづけておられた。

ミオンボ林の向こうに夕日が沈む。乾季には夕

焼けがひとときわ赤く輝く。それを眺めながら、ノートを整理する手をとめて「美しいのう」とつぶやく掛谷さんの姿は、ミオンボ林の風景と一体になって、私の記憶のなかに鮮やかだ。いまもふと呼びかければ、あの張りのある声が響いてくるような気がする。掛谷さんの思想を、身をもって示してくださった世界への問いかけを、私たちはどれほど受けつづることができるだろうか。いつまでも敬愛する師であり先達である掛谷誠先生に、言いつくせない感謝をこめて、追悼の記としたい。

心からご冥福をお祈りいたします。

## カケヤ・マジック

伊谷 樹一

### 京都大学アフリカ地域研究資料センター

「世の中で一番かゆいのはナンキンムシやな。すばしっこいけど、あれには捕まえ方があるんや。」というくだりで始まるナンキンムシの撃退談は、掛谷さんの得意話の1つだった。1970年代にタンガニカ湖東岸の山中でトングウェ社会の調査をしておられた掛谷さんは、ある日、湖畔の村ムガンボの民家に泊めてもらうことになった。ムガンボは車道もない孤立した村だが、湖を往来するフェリーがムガンボの沖合に碇泊するので、村には日用雑貨を売るインド人の商店が一軒あった。このインド人店主とトングウェ談話で盛り上がり、一夜の宿を提供してもらうことになったのである。通された客間にはマットレス付きのベッドが置かれていた。村で生活していると、柔らかいマットレスはとてもありがたいのだが、ときにそこはナンキンムシの住処となっている。ナンキンムシは、シラミ目トコジラミ科の吸血昆虫で、正式和名をトコジラミという。その名の通り、普段はベッドなどの隙間に潜んでいて、人が寝静まると身体を這いずり回って吸血する。逃げ足が速く、体が扁平なため叩いても死なず、刺されると猛烈なかゆさが2~3週間も続く。滅多に人の来ないベッドでは、腹を空かしたナンキンムシたちが掛谷さんを待ち構えていた。掛谷さんは一晩中ナンキンムシと格闘し、夜明け前になってようやくその戦い

に活路を見いだした。

「ナンキンムシが身体を這い出したら、全神経をそこに集中し、静かに懐中電灯を取り出す。動きが止まって、いざ吸血管を刺そうとした瞬間に懐中電灯でパッと光を照らすんや。不意を突かれたナンキンムシは『エッ』てな顔をして身動きできなくなる。それをおもむろに指で摘まみ上げ、爪と爪で押しつぶすんや。」

取るに足らない話なのだが、掛谷さんはこのナンキンムシ談が大のお気に入り、私は10回以上も聞かされた。じつは、この話には掛谷さんらしさがいろいろ詰まっている。世話になった人への非礼は掛谷さんがもっとも嫌うところで、一宿一飯の恩義がある家で殺虫剤をまき散らすなど彼の品性が許さない。さりげなく事態を收拾して、何食わぬ顔でさっそうと立ち去るのが掛谷流の美学だった。掛谷さんはセミナーでも読書でも飲み会でも、何でもかんでも真剣勝負で、「それが相手に対する礼儀や」とよくおっしゃっておられた。ナンキンムシに礼を尽くしたわけではなからうが、1匹でもいれば一睡もできないのだから、その撃退も翌日の仕事がかかった真剣勝負だったのだ。

近代的な物資の乏しいアフリカの農村では、何事にもその場にある物で対処しなければならない。その工夫がアフリカ理解の原点であり、アフリカ暮らしの楽しみでもある。ナンキンムシと懐中電灯という奇妙な組み合わせも、物が無いことから生まれた発想だったのだが、掛谷さんはこういう一連の行動を総じて「不便を楽しむ」と表現されていた。状況を総括し、それを絶妙な一言で表現するのは掛谷さんの真骨頂だった。豊富な知識と鋭い洞察から導き出される言葉には説得力があったが、どこか滑稽で温もりがあり、苦境に立たされている者には安心感を抱かせた。謎めいた表現はすぐにはその真意を理解できない。あれこれ思考をめぐらすうちに、いつしか事の核心に近づいている、そんな気にさせられることもよくあった。

1990年代から、私たちは農村開発に携わっていた。その基軸となっていたのは、掛谷さんが学生時代から実践してこられた『一点突破、全面展開』という思想だった。対象の急所を見つけ、そこを

全力で突破して事態の全面的な打開を図るというのだ。研究や事業が閉塞状態に陥ると、掛谷さんはわざとそれまでとは次元の異なる、より抽象的な目標を掲げられた。眼前の目標の達成に躍起になっていたわれわれは一瞬目標を見失うのだが、やがて固定概念の呪縛から解き放たれ、本来の目標をより深く認識することができるようになった。掛谷さんはこの風変わりな方策を『妙手』と呼んでおられた。妙手とは、囲碁などで定石や手筋にはない常識外れの手をいう。妙手を打つことで、対戦相手はそれまでの想定（読み）をすべて破棄して次の手を一から考え直さなければならない。ときにそれは対戦相手の動揺を誘って戦況を一変させる。掛谷さんが繰り出す研究や実践上の妙手も、一時的に現場を攪乱し、本来の目標について再考させることで知恵や力を再結集させる狙いがあったのだと思う。

17年におよぶ掛谷さんとのアフリカ旅行はまるで西遊記のようだった。「アフリカは体力勝負やな。」とおっしゃるわりには、力仕事はすべてこちらに任せ、ご自分はおまへはもっぱら頭脳労働に徹しておられた。さまざまな発見に彩られた道中はじつに楽しく、禅問答のような会話では現代におけるアフリカ研究の意味について考えさせられた。2008年に掛谷さんは大学を停年退職されてフィールドワークの第一線からは退かれたが、私がアフリカから帰国すれば、現地のお話を肴に夜がふけるまで酒を酌み交わした。私が掛谷さんの訃報を知ったのはタンザニアだった。悲しみと喪失感は筆舌に尽くしがたいが、ともに過ごした時間は少しも色あせることなく、それどころか日が経つにつれてますます鮮明になってきている。掛谷さんが亡くなられるのと時を同じくして、私は腰を痛めてしまった。「体力だけでなく、おまえもそろそろ頭を使えよ。」、そんな声が聞こえてきそう。

## 掛谷さんの思い出 —呪医と総括屋—

太田 至

### 京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科

わたしが、最初に掛谷さんの存在を知ったのは、1973年の夏頃のことだったと思う。わたしは1972年に京都大学に入学したが、自分が何をしたいのかまったくわからず、ほとんど授業にも出ない日々をすごしていた。しかし、米山俊直さんが講じられていた「文化人類学」は聞きにいており、また、米山さんが学生を鼓舞しつつすすめておられた祇園祭の調査にも参加して、米山さんの研究室に出入りしていた。わたしはそこで偶然に掛谷さんに出会った。

そのころの掛谷さんは、すでに1年半（1971年4月～1972年10月）におよぶトングウェ社会の長期調査を終えられていた。いまから思えばこのときの掛谷さんは、タンザニアからもちかえった膨大な資料の整理にとりくまれていたときだったし、すでに福井大学に就職することが決まっていたのだろう。米山さんは、この気鋭の人類学者と一緒に新米学生をちょっとからかってやろうという調子で、「太田君、この人はタンザニアで呪医に入門して奥義をきわめてきたんだよ。呪薬を手ぬりこんでもらって帰ってきたんだ。掛谷さん、みせてあげて」といったことを言われた。掛谷さんは、ちょっと迷惑そうな顔をしつつ、無言で左手をわたしのまえに突き出して、親指と人差し指のつけ根あたりの癬痕をみせてくれた。「呪薬ってなんですか」とたずねるわたしに掛谷さんは、フッと恥ずかしそうな笑顔をみせただけで無言だった。その様子は、人類学をかじりはじめたばかりの初心者がいなく「アフリカで呪医になった人」という奇っ怪なイメージからはほど遠いものだったが、掛谷さんのギョロツとした目つきだけが、つよく印象に残った。

これが、わたしが掛谷さんに出会った最初のときだった。その後大学院にすすんだわたしは、掛谷さんと同じく伊谷純一郎さんの研究室に所属したが、すでに掛谷さんは福井大学に転出されており、学生時代には、あまりお話する機会がなかった。そして、1990年に掛谷さんが京都大学アフリカ

地域研究センターの教授に就任されてから、わたしは掛谷さんの同僚として仕事をするようになった。それから掛谷さんが定年退職されるまでの19年ほどのあいだに、わたしは掛谷さんからたくさんのお話を聞いていただいたが、それは、たとえば以下のようなものだった。

京大のアフリカセンターでは毎週水曜日にゼミをやっていた。その場でわたしが口頭発表をしていたときのことである。それは、わたしの手元にあるメモによれば1997年7月16日だった。この日のゼミで私は、牧畜民であるトゥルカナの人の家が畜を所有し、また、譲渡するときに使われるさまざまな語彙について、細部にわたる説明をしていた。「この動詞は家畜を交換するときに出てくるが、メスの家畜を供出して交換にオスをうけとる人だけが主語になることができる。だからこの動詞は単に『交換する』という意味ではなく・・・」「この動詞は、このメスの『ミルクをしぼって飲んでいいよ』というように、ミルクの権利だけを譲渡するときを使う単語である・・・」といった調子である。こうした長々とした説明が一段落し、いくつかの具体的な質問にわたしが答えたあと、掛谷さんは、「太田がこの話をしているのは、おおきく言えばどういうことなんだ？」と短く、しかし厳しく問われた。

この時期に京大のアフリカセンターは、すでに設立から10年間の時限が経過しており、翌年の1998年4月には、地域研究の学位を取得させる大学院を日本ではじめて設置することが決まっていた。そうした動きの中心にいた掛谷さんは、設立の準備にむけて事務的に多忙をきわめられていただけでなく、「地域研究とは何か」「どうすればそれを発展させることができるのか」について深く思索をめぐらされていたにちがいない。そのようなときに、微細なことばかりにこだわっているわたしの口頭発表は、掛谷さんの目には、地域研究としての位置づけに無頓着なもの、そして時代の要請に対して鈍感なものに映ったのである。

## 掛谷さんの真骨頂

山極 寿一  
京都大学理学研究科

あれは1979年の初頭だったかと思う。私が初めてアフリカでゴリラの調査を始めた頃のことだ。掛谷誠さんと英子さん夫妻が連れだって私の調査地を訪れた。現在、山口県立大に勤める安溪遊地・貴子夫妻もいっしょだった。4人はコンゴ川の東岸にあるキンデユという地域で漁労民の調査をした帰りに、私が滞在していたキヴ州のカフジ・ピエガ国立公園に立ち寄ったのだった。掛谷さんは、京都大学人類学教室の大学院博士課程に在籍していた安溪遊地さんを指導する立場で、フィールド調査に同行していた。

私が大学院に入ったとき、研究室には何とも不思議な雰囲気漂っていた。教授は池田次郎先生、助教授は伊谷純一郎先生で、池田先生はいつも白衣を着て骨をながめておられたし、伊谷先生は背広を着ていつもせかせかと歩きまわっていた。ゼミ室でゆったりとたばこを吸っているのは助手の原子令三さんと石田英実さん、院生たちはさらにわが物顔で部屋を占領していた。机の上には雑誌や様々な資料とともに作りかけの料理や酒瓶が転がっていたし、寝袋や長靴などフィールド調査の用具が散らばっていた。院生たちが調査から帰ってきては酒盛りを開くためである。そんな梁山泊のような部屋を仕切っていたのは掛谷さんだった。私が入学したとき、すでに掛谷さんは福井大学の助教授として赴任していたのだが、掛谷さんの噂は部屋のあちこちに染みついていた。「掛谷さんはなあ、このテーブルの上で花札やってはったんやで」とか、「ゼミの時はなあ、わけのわからんことを言うてる発表者をはったとにらみ、お前の言いたいことはこういうことやなってまとめはったんや」とか、「掛谷さんを納得させるんは、むずかしいでえ」とかである。酒の香りが充満し、たばこの煙がもうもうとするなかで、フィールドワークの神髄を説いておられた、親分のような掛谷さんの姿を想像しながら私は育った。

当時、自然人類学教室には3種類の学徒がいた。人類やサル骨格や化石を調べている「ホネ

屋」、野生のサルや類人猿の行動や生態を調べる「サル屋」、そして狩猟採集民、漁労民など人類の生態を調べる「ヒト屋」である。サル屋とヒト屋を束ねる伊谷さんは、始まったばかりの生態人類学に精力を集中していたし、助手の原子さん、石田さんはヒト屋とホネ屋だったので、サル屋の学生がフィールド調査に行くときに教員は同行しなかった。私のゴリラ調査も、当時琉球大学にいらした加納隆至先生の隊に入れていただき、ボノボの調査へ赴く先輩の黒田末寿さんや北村光二さんとコンゴの首都キンシャサまで同行し、そこから単身で東部のカフジへ向かう単独行だった。だから、先輩の掛谷さんに同行してもらえる安溪さんをちょっぴりうらやましく思ったものだ。

しかし、先輩の薫陶を受けながらフィールド調査をするのは、いい面も悪い面もある。先輩の経験に助けられることも多いのだが、それに制約されてとんでもない目に会うこともあるのだ。カフジを訪問したとき、安溪貴子さんが語ったキンデユでの体験が今でも不思議に心に残っている。熱帯雨林を初めて歩いたとき、掛谷さんが、

「貴子さん、ほら、あそこに面白い鳥がいるよ」

と教えてくれたので、立ち止って、双眼鏡を構えて樹冠をながめた。すると突然、足に鋭い痛みが走り、おおあわてでズボンの上からあちこち押さえなければならなくなった。何とグンタイアリの行列の真ん中に突っ立っていたのである。ズボンのすそから次々に兵隊アリが這い上がってきて、クワガタムシみたいな大きな口で足に咬みついたのである。掛谷さんはそれを知っていて、わざと貴子さんに立ち止るよう注意を逸らしたのだ。グンタイアリの痛みを直接経験させ、森を歩くときの注意を与えようとしたに違いないのだが、貴子さんはそんな掛谷さんの心遣いが悲しく思えて涙が出たそうだ。一見、ひどいなあと思う人もいるだろう。でも、掛谷さんの気持ちはよくわかる。おそらく、こんな機会に恵まれたら、今でも同じことを私は後輩に対してやるだろう。これが私たちの研究室の伝統的な教育法だと私は思う。

もうひとつの経験談は安溪遊地さんが語ったも



のだ。4人でコンゴ河を船で渡ることになった。川岸で船頭に頼んだら二つ返事で引き受けてくれた。ところが、川の真ん中までこぎ出したとき、船頭が船を止めて、運賃の増額を要求してきた。いやなら、ここから泳いで行けと言う。明らかな脅しである。その時、掛谷さんはあわてず騒がず、

「サワサワ、トヨタシキリザーナ（まあまあ、分かり合おうじゃないか）」

とにっこり笑って言ったそう。この緊張した場面でもよく、こういった言葉が出せたと思う。その一言で船頭は打ち解け、たいした値上げもせずに、無事向こう岸に渡してくれたそう。これが、先輩といっしょに旅をする幸運である。初めてのアフリカで、決してこんなに落ち着いて強面の相手と交渉することはできないからだ。先輩たちがわが身を賭して得た経験を現場で見て初めて、ああこうやって難局を乗り切んだなと悟ることができる。タンザニアの原野でトングウェの呪医として活躍した掛谷さんの経験と自負は、他の追随を許さない奥行きと迫りに満ちたものだったろう。コンゴ河の船頭との会話は、卓越したネゴシエーターとして名を馳せた掛谷さんの真骨頂だったに違いない。

そういった場面に居合わせた安溪夫妻は幸運だったと思う。おそらく掛谷さんは、その後も英子夫人といっしょにたくさんの学生たちを連れ歩きながら、自らの類まれな体験を伝えたことだろう。学生たちの泣き顔や驚いた様子が目に見えるような気がする。だから掛谷さんが歩いた世界は、学生たちの身にしみついて今でも生きているはずなのである。

## 忘れられない掛谷さんのひと言

近藤 史

### 京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科

農学部からアフリカ地域研究の大学院にすすみ、人文社会系の知識も文章力もさっぱり欠いていた私にとって、教員のなかでも掛谷さんは雲の上のような存在だった。雑談は交わしても、拙い議論

で頭を抱えさせてしまうかと思うと研究室の敷居は高く、論文の相談に伺う勇気を出せたのは数えるほどだ。もっぱら、ゼミや研究会での発言を聞き逃すまいと耳をそばだてていた。院生時代の最後の年に、1泊だけだったが私のフィールドを訪れてくださった掛谷さんを畑へご案内したとき、そして掛谷さんが博士論文の審査委員を引き受けてくださったときは、舞い上がるほど嬉しかった。

折にふれて、そうした思い出が鮮やかによみがえってくるのだが、掛谷さんの訃報を受け取った日に真っ先に思い出したのは、ある年に大学院で催された新入生歓迎会の席でのことだ。宴も半ばにさしかかった頃、私も含め、前年度末に修士論文を書き終えて浮かれた院生たちが、たまさかに掛谷さんのまわりに集い、酒を片手に論文の公評会がはじまった。ほかの院生に対しては平等主義がうんぬんと生態人類学的なコメントを滑らかに発しておられた掛谷さんが、近藤は…と言いよんだ末、「海綿みたいなやな」とおっしゃった。

農学部で培った畑での観察や実験室での土壌分析が、海綿の網目状の骨格に相当し、そこへさまざまな観点から質問やコメントを浴びせるたびに、どんどん吸収されていく手ごたえはある。ところが、何やら吸い込まれるだけで、その末にどんな研究ができあがるのか未だ見えてこないところが、いかにも海綿らしいのだという。台所で活躍する合成樹脂製の人造スポンジを引き合いにだしつつ、あえて海綿という言葉を用いることによって、形状の定まらないモノという意図が強調された。フィールドで起こっている農業展開の面白さに大いに助けられて、修士論文はあれこれ記述してなんとなくカタチになったが、博士論文はそれではだめだ。自分なりの方向性を見つけてきちんと議論を組み立てなさい、といった内容でお話は締めくくられた。

自分で書いた修士論文の消化不良ぐあいに悶々としていた胸中をぴたりと当てられたようで、海綿という言葉は私の脳裏に突き刺さった。意味はわかってもそこから脱する道のりは険しく、その日から6年もかけて、掛谷さんが定年退職される年ようやく博士論文を書きあげた。しかも結局、

博士論文は海綿を脱することができたのか否か、伺いそびれたまま、掛谷さんは逝ってしまわれた。

それ以来、私の研究は海綿のままではないか、今ならば何と表現してくださるだろうかと、繰り返し考える。もし海綿を脱していたとしても、まだせいぜい人造スポンジ止まりだろうか。いつか天国の掛谷さんに再会するときには、同じ多孔質でも、「ええ出汁吸って、うまい高野豆腐が炊けたやないか」と笑っていただけるように、これから精進していきたい。生前のお姿を偲びつつ、謹んで掛谷さんのご冥福をお祈り申し上げます。

## 掛谷さんと私の修論

池谷 和信

国立民族学博物館・総合研究大学院大学

### 初めて研究会に参加

「これから隣の山へ泥棒に行く。静かにしてくれ。隣の人が来たら困る」と私に語り、それ以降の山中での情報交換は、身振りや手振り、それに口笛によった。  
(…略…)

これは、私がプロの山菜（ゼンマイ）採りに弟子入りしていたときにかわした会話の一部である。今から30年も前に、生態人類学研究会での報告の際のレジメから抜粋した。私は、この研究会で初めて発表したということもあって、とても緊張していたのを今でもよく覚えている。

当時、私は、筑波大学大学院の修士課程・環境科学研究科の文化生態学研究室に所属していて、掛谷さんから直接の指導を受けていた。そこには、ネパールヒマラヤ研究の川喜田二郎さん、縄文時代の生業研究の西田正規さんもいて、充実したスタッフであった。学生もまた、北陸の海岸で岩ノリ採取を調査する同期の村田元夫さん、ワラビの根からデンプンを取り出す技術を研究している先輩の杉山是清さんなど数えきれない。お互いのテーマも近く日本各地に散らばりフィールドワークを重ねる人が集まっていた。昼夜を問わず研究室には誰かがいて、雑多な感じがあった。今思えば、当

時、日本列島を対象にした生態人類学のセンターの一つであったようにも思う。

研究会は、栃木県鬼怒川温泉のホテルで泊りで行われた。私たちの研究室が、ホストである。掛谷さんといえば、当時、世間に登場したばかりのワープロの習得に精を出していたのを思い出す。もちろん私を含めて多くは、手書きで資料をまとめていたのであるが、掛谷さんは新たなものの導入に積極的であった。そして、当日、ワープロを使っただけのプレゼンに得意げであった。

**修論での「指導」** 私の東北での山菜研究は、東北大学の卒論時からのものであるが、修士に入って大きく展開することができた。まず、山菜採りの現地調査は、雪解け後の5月ごろを逃すと参与することはできない。しかし、その時期は修士に入ったばかりで大学の講義が多い。私は、おそるおそる掛谷さんの所に行って調査に行きたいというと、講義をさぼってもよいと即答してくれた時は嬉しかった。結局、その年の調査は現地の人から許可がおりず失敗に終わったが、この教訓を生かしたおかげで翌年、うまくいったのである。

私は、卒論では村人からの聞き取りを方法の中心にすえて山菜採りの各世帯のナワバリの資源利用を研究テーマにしていた。しかし、聞き取りでは、本当のことを言ってくれているのか、不安が多かった。当時、掛谷さんは、生態人類学では自然と深くかかわる生計活動を定量化することの重要性に対して口をすっぱく言っていたが、その方法は私のニーズにあっていた。同時に、この分野はまだ新しい。君たちが切り開いていくという言葉は魅力的で、私はずるずるこの分野に入っていた。

研究室のゼミは、それぞれ役回りがあった。川喜田さんや西田さんは大きな方向性を自由に語り、掛谷さんはきめ細かい点や論理の構成まで指摘する。今思えば、川喜田さんらから夢をもらい、掛谷さんから論文を書く力を学んだと思っている。当時、同級生が少なかったこともあって、私は、ほぼ毎月、ゼミで報告する機会に恵まれた。ゼミは深夜まで続いた。あまりにもゼンマイにしつこ

いので、掛谷さんからおまえはスッポンのようだともいわれた。ゼミの最後になると、掛谷さんが切れ味鋭く話をまとめるのが常であった。最近、自分が主催するゼミで同じような役まわりになってきたと感じる時があるが、なかなかうまくいかないものである。

**私の宝物** 思えば、生態人類学研究会での報告が私の運命を決めることになった。その後、山菜採りの研究がある程度認められて、1987年にアフリカ狩猟採集民に関する調査隊に入ることができたのである。当時、私はすでに東北大学理学部の大学院に編入学していたが、大学の建物の前にある公衆電話でした掛谷さんとの会話が忘れられない。山菜採りと同じようにアフリカでの研究をすればよいと……。

その後、私の修論は、大幅な加筆修正を加えて、1989年に『季刊人類学 20 巻 1 号』に「多雪地帯の山村におけるゼンマイ採集活動と採集ナワバリ」と題して掲載された。その際にも掛谷さんのサポートなくしては、刊行は難しかったと思っている。彼は、400字づめでおよそ80枚の手書きの原稿を入念にチェックしてくれたのだ。とくに論理力の弱かった私の考察の部分では、原稿が真っ赤になった。これを見ていて、どのくらい時間をかけてくれたのだろうと思うと、頭が上がらない。その原稿の束は、今でも研究室に大切に保存していて私の宝になっている。

## 掛谷さんとの思い出

市川光雄

掛谷さんと私は、学年で言うと2年違いだが、大学に入ってから掛谷さんは1年留年し、私は2年留年したので、私が大学院に入ったときは掛谷さんはすでに博士課程だった。トカラ列島で修士研究を終え、タンザニアに夫婦で行かれる直前だった。ほとんどの人が大学院に入ってから本格的に人類学の勉強を始めていた時代なので、このあたりの3年間の差は大きく、掛谷さんは私にとっては大先輩だった。大学院に入る前に、私たち、つ

まり当時の4回生だった秋道さんや多賀谷さんなどと一緒に掛谷さんに会いに行ったことがある。生態人類学という、「骨」でも「サル」でもないことを研究する分野ができればいい。ついては、気鋭の人類学者として伊谷先生から紹介された掛谷さんに話を聞こうというわけである。掛谷さんは、当時の人類学研究室の2階に並んだ小部屋のひとつで、椅子の上にあぐらをかいて座っていた。「生態人類学をやりたいんですけど」とおそるおそる切り出したら、掛谷さんはぐーっとのぞき込むように私たちを見て、「生態人類学？そんなものがあるのかどうか、僕は知らん」と切り返してきた。にべもなくあしらわれたわけだが、そんな名前にこだわるのではなく、自分で好きなことを切り開いてやりなはれ、という意味だったと今では思っている。

掛谷さんとはじめて一緒に調査にいったのは、それから、10年以上も経ってからだった。掛谷さんが代表を務めたザンビアの科研費調査隊で、予備調査が1982年に始まった。このときは、掛谷さん、英子夫人、私の3人で2ヵ月をかけ、ザンビアのほとんどすべての地域をまわり、調査地を探した。また、この年にはじめてヨーロッパ経由でアフリカに入った。空港から市内につづく道で、どの建物からもよきよきと煙突がでていいるロンドンの町並みをみて、英子夫人が「メリーポピンスみたい！」といったのをよく覚えている。ロンドンでは資料の収集や飛行機待ちのために数日間滞在した。昼間は書店や図書館でアフリカ関係の文献を漁り、自分なら一生かかっても読めないほどの書籍を購入し、文献のコピーをとった。掛谷さんはフィールドワーク派だと思っていたが、同時に大変な読書家でもあることをこのときに発見した。夜になると、英子夫人をホテルに残し、「英子には内緒やで」と言う掛谷さんを誘って、下町のいかがわしい界隈を徘徊したのも懐かしい思い出である。

ザンビアでは、最初の1週間だけレンタカーを使い、あとはバスとヒッチで調査地の候補を見てまわった。バスの旅行はけっこうきつかった。地方都市に行くとはほとんど車が走っておらず、バス

を降りてから、宿を探したり、目的の場所に移動するのもなかなか面倒だった。大きなリュックを背負い、自炊のための調理具などの入ったバケツや袋を抱えて宿を探すのは一苦勞。ゲストハウスなどがあっても、そこまでかんかん照りの中を歩いて行くのが難儀だった。私は横着なので、すぐにヒッチできる車がないか、きよろきよろと探していたが、掛谷さんはいつもだまってさっさと歩きだした。文句言わずに歩け、と言わんばかりで、いったん歩き出したら止まらない。英子夫人がそのあとをすこし困ったような顔をしてついて行った。私が運良く車を見つけて追いつくと、面白くなさそうな顔をして乗ってきた。この旅の最後に、ザンビア西部の町モンゴのゲストハウスで、「ザンビアは面白くないので、来年はコンゴのイトゥリに行きたい」と口にしたら、ひどく怒られ、延々と説教されたことを思い出す。結局、その翌年もザンビアで、今井さんとともにスワンプ漁撈民の調査をすることになったが、それ以降は、掛谷さんは乾燥地域の農業調査に向かい、私の方は湿润地域での狩猟採集社会の調査に専念したため、一緒に調査をする機会がなかった。

最近の話になるが、一昨年的人类学研究室開設50周年のときに、掛谷さんと久しぶりに対面的に話し合う機会があった。そのとき、「組織を運営するには組織の顔になるNo.1とそれを支えるNo.2が必要だが、われらはNo.2のやり方しか知らん。No.1の仕事は、No.2をうまく使うことだ。われらにはそれができん。君も組織の運営をするなら、No.2をつくらんとあかん」と説教を受けた。結局私も、No.2ができないまま、再就職先を離れることになった。掛谷さんは、表に出る機会こそ多くはなかったが、実質的な力をもつ「黒幕」で、いわば傑出したNo.2でもあったと思う。

「あの世」に逝けば、先に逝った人たちと一緒にすることができるという話を聞いたことがある。掛谷さんも今頃はあちらの世界で、先に逝かれた伊谷先生や原子さん、大西田さんなどと会っているのだろうか。「あいつら、まだあんなことをしとるんや」と笑う声が聞こえるような気がする。私もいずれ、ご一緒させていただくことになるだ

ろう。そのときはよろしく願います。

## 弔辞（掛谷誠さん偲ぶ会）

嘉田 由紀子  
滋賀県知事

掛谷さん、あれは1970年代のはじめの頃、新婚早々の樋ノ口町のお宅で、何度も夕食をご馳走していただきました。一人寂しい下宿身の立ち場からすると夕食のご馳走は何よりの喜びであり、癒やしであり、またそのように情けをかけてくださる大先輩がおられることを嬉しく思いました。そして、何よりも生のアフリカのお話を聞けるのが刺激的でした。なぜ、トングウェの呪術師に挑戦したのか、不思議な薬草の話など、いまから思うとたくさん伺いました。わたしもずいぶん別の世界に来てしまい、長い間お会いできなかった。そのときに急に旅立たれてしまわれて、ぽっかりと心に大きな穴が空いたような思いです。どうかアフリカのタンガニカ湖や森の精霊のように奥深い自然とともに安らかにお休みください。

(2014年3月22日)

掛谷誠さん 追悼の集い



トングウェ





## ムパラ (1976)



Allen Roberts  
(UCLA)



## バンボテ族 (1976~77)



## 森の散策



## イトウリ川 (1978)



## キャンプ跡



## 憩いのひととき



## お気に入りの彼女？



I truly appreciate your letting me know about the event in memory of our friend and your mentor this Saturday. It would be wonderful if you could mention how greatly I enjoyed meeting and getting to know Hideko and Makoto (and you) when we met in Kalemie and then traveled to my home in Mpala. Kakeya San was such a wonderful man-- very smart and very funny, especially in Kiswahili. We enjoyed laughing together a great deal, as we did many years later when he invited me to give a talk at Kyoto University, and then some years after that when we saw each other in Tokyo. Despite being so far apart, we always felt so close, and I miss my friend a great deal. May he find peace, and may Hideko be blessed in his absence.

## 筑波大学時代



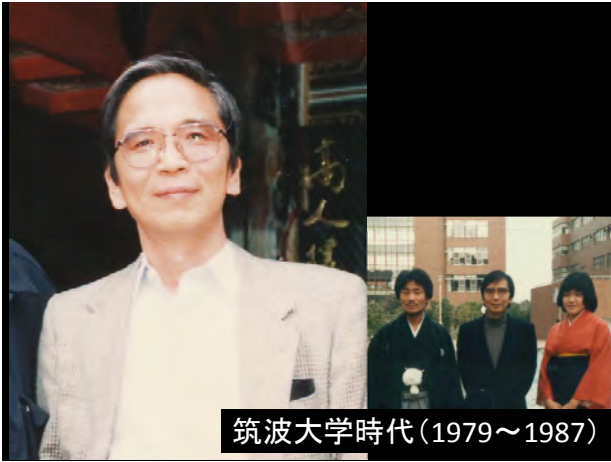
筑波大学時代(1979~1987)



1980年代







筑波大学時代 (1979~1987)



筑波大学時代 (1979~1987)



筑波大学時代 (1979~1987)



筑波大学時代 (1979~1987)



筑波大学時代 (1979~1987)



筑波大学時代 (1979~1987)



筑波大学時代 (1979~1987)



筑波大学時代 (1979~1987)



筑波大学時代 (1979~1987)



1980年代



1980年代



筑波大学時代(1987)



1980年代



ベンバ



1988年 タンザニア



1988年 ザンビア・ベンバ



1988年 ザンビア・ベンバ



1988年 ザンビア・ベンバ



1992年 ザンビア・ベンバ



1992年 ザンビア・ベンバ



1998年 ザンビア・ベンバ

エチオピア  
1998年



1998年 エチオピア



1998年 エチオピア



1998年 エチオピア



1998年 エチオピア



1998年 エチオピア

タンザニア  
1994年～

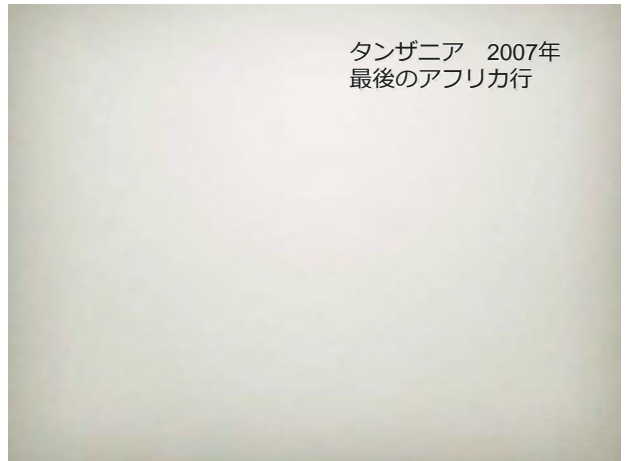


2007年 タンザニア



2007年 タンザニア・ワンダ







2007年 タンザニア



2007年 タンザニア・ワンダ



2007年 タンザニア



2007年 タンザニア



2007年 タンザニア





2007年 タンザニア



2007年 タンザニア



2013年 名古屋



1996年7月 ダルエスサラームにて（根本利通氏提供；根本氏の原稿参照）



2008年3月 京大会館にて（池野旬氏提供）

本写真集は、2014年3月22日におこなわれた「掛谷誠さん 追悼の集い」において映写されたパワーポイントを中心として作成したものです。写真を提供していただいた方々に感謝します。

生態人類学会ニュースレター No.20 別冊

2014年6月発行

別冊編集担当 太田至，木村大治，伊谷樹一，山越言，  
大山修一